

嶽山遺跡発掘調査報告書

—富田林市龍泉所在—



1981

嶽山遺跡発掘調査団
富田林市教育委員会

富田林市埋藏文化財調査報告書 六

嶽山遺跡発掘調査報告書

—富田林市龍泉所在—

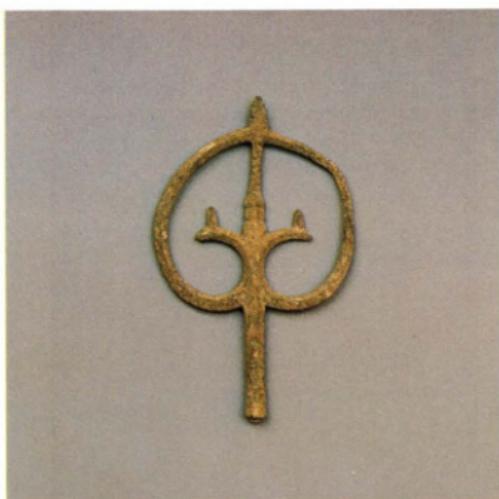
嶽山遺跡発掘調査団

富田林市教育委員会

昭和五十六年十二月



脑之坊 西端部



摩尼院出土 鎏状先端部



脇之坊他出土 中国からの輸入磁器

はじめに

富田林市は、古くから南河内地区の中心をなし、立派な歴史と豊かな美しい自然に恵まれ、多くの文化遺産を育んでまいりました。

いうまでもなく、先人の貴重な遺産である文化財は、将来の文化的向上発展をはかる基礎ともなるもので、これを保護し後世に伝えることは私どもに課せられた重要な責務であると考えています。

さて、このたび嶽山道路新設・拡幅工事を市において計画いたしましたが、工事の施行に先立って調査が必要なため、嶽山遺跡発掘調査団に委託し、発掘調査を実施していただきました。

今回発掘調査を行っていただきました付近には、縄文時代の遺跡等が分布し、歴史的にも価値の高い地域であります。特にこの調査の中心ともいべき龍泉寺周辺の発掘状況に興味が持ておりましたが、幸い、以下にも詳しく報告されていますように、当地域の古代文化の一端、あるいは龍泉寺の盛時の一面が明らかになるなど、貴重な多くの成果をあげていただき、我々としても非常に喜んでいるところであります。

なお最後になりましたが、このたびの発掘調査の団長として種々ご指導を賜わりました神戸商船大学教授・北野耕平先生、並びに連日炎天下にもかかわらず直接調査に当っていただきました大谷女子大学講師・中村浩先生、その他関係者の皆さんのご尽力に対し、心から感謝の意を表しますとともに、今後とも変わぬお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

昭和56年12月

富田林市教育委員会
教育長 福田治平

例　　言

1. 本書は、嶽山遺跡発掘調査団（団長 北野耕平）が、富田林市（市長 内田次郎）から委託された嶽山道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の報告書である。
2. 調査にあたっては、大谷女子大学文学部講師 中村 浩を現地での調査主任とし、神戸商船大学教授 北野耕平が調査を総括した。調査は昭和56年8月13日から開始し、9月20日現地調査を終了した。この間、富田林市教育委員会技師 中辻 亘、花園大学 青木昭和、水沢市教育委員会調査員 西野 修氏の他、樋口 美樹子、夏原信義、樋口吉文氏、大谷女子大学考古学研究会（森下牧子、森島由貴、井山温子、松田智子、宮内尉久子、小西益子、細谷知代、藤野辰美、菅原環他）また大阪府教育委員会をはじめ地元の方々からも多大なる有益な助言、協力をえた。ここに記して謝意を表したいと思う。
3. 出土遺物の整理は、大谷女子大学資料館で実施した。その間青木昭和、樋口美樹子、井山温子、松田智子、宮内尉久子、森島由貴、森下牧子氏他の参加をえた。
4. 本書の執筆は、各々文末に記すものがあたった。全体の編集は、中村が行い、北野が監修した。なお製図には、樋口美樹子、宮内尉久子氏の協力をえた。

本文目次

はじめに

例　　言

第1章	調査経過	1
第2章	遺構	7
1.	概観	7
2.	I区の遺構	7
3.	II区の遺構	16
4.	小結	22
第3章	遺物	23
1.	概観	23
2.	遺物各説	24
3.	小結	33
あとがき		35

図版目次

- 表頭カラー 遺構写真（藍之坊西端）
 遺物写真（錫杖、磁器）
- P L 1 位 置 図（調査地点と周辺の遺跡）
 2 遺構実測図（F地区X南、B地区）
 3 “ (C地区)
 4 “ (D、E地区)
 5 “ (F地区)
 6 遺物実測図（土師質土器、瓦器、土釜）
 7 “ (瓦質土器、陶質土器、
 上部質土器、磁器)
 8 “ (軒丸瓦、軒平瓦、鳥糞)
 9 遺構写真（第1～5トレンチ遺景、
 第1トレンチ全景）
 10 “ (第2、第3トレンチ全景)
 11 “ (第4、第5トレンチ全景)
 12 “ (第6、第7トレンチ全景)
 13 “ (第8、第9トレンチ全景)
 14 “ (第10、第11トレンチ全景)
 15 “ (第12、第13トレンチ全景)
 16 “ (第14、第15トレンチ全景)
 17 “ (第16、第9トレンチ全景)
 18 “ (第20トレンチ全景、
 および細部)
 19 “ (A地区、B地区)
 20 “ (C地区)
 21 “ (D地区北部、南部)
 22 “ (E地区全景、
 D、E間トレンチ全景)
 23 “ (F地区調査前、表土除去後)
 24 “ (F地区)
 25 “ (F地区SK09上層、
 F地区X南)
- 26 遺物写真（剝片、石器）
 27 “ (“)
 28 “ (瓦質土器、陶質土器、土釜)
 29 “ (陶器、磁器)

挿図目次

- fig.1 調査状況（C地区、F地区X） 4
 2 第1～第5トレンチ地形測量図 8
 3 各トレンチ実測図 9～10
 4 第6～11トレンチ地形測量図 11
 5 第12～16 “ 13
 6 第17～19 “ 15
 7 調査区配置図（C地区、F地区X） 16
 8 “ (D地区、E地区) 17
 9 「ゴイヤマ」測量図 19
 10 剥片、石器実測図 26
 11 “ 27
 12 遺物実測図および拓影（須恵器） 29
 13 陶磁器実測図 31
 14 藩之坊出土錫杖実測図 34

表 目 次

- table 1 錫山道跡出土遺物一覧 23
 2 右様、剝片の計測値 28

第1章 調査経過

1. 調査にいたる経過

嶽山は、富田林市の南東に位置しており、市域内では、もっとも高く、なだらかな円丘からなる秀麗な山としてよく知られている。

山頂には南北朝のころ、楠木正成が要害の地として支城を構えた嶽山城（龍泉寺城）の遺跡がある。山腹には、さらに古く奈良時代前期の創建と伝える名刹、「龍泉寺」があって、国指定名勝の庭園や、重要文化財の仁王門を有し、往古における輪奐の美を偲ばせる。

また嶽山一帯には、窯跡や骨蔵器を伴った火葬墓などの遺跡をはじめ、陶器、磁器といった遺物の散布地が多く分布している。ただ従来、大阪府教育委員会の分布図では、周知の遺跡として明確に範囲の確定がなされていなかったきらいもあって、今後の分布調査に期待するところが少なくない。一方、昭和49年の大阪府教育委員会、昭和51～52、55年の大谷女子大、竜泉寺が行なった発掘調査では、龍泉寺坊院跡の一部や窯跡が確認されている。これらは同寺院に伝わる往時の伽藍配置図との比較考証も可能であり、当地周辺が重要な埋蔵文化財の包蔵地であることは疑いないところである。

昭和55年度、この嶽山山頂に郵政省の簡易保険保養所の建設が計画され、それに先立ち、富田林市が嶽山現道の拡幅を含む、嶽山道路（仮称）建設工事を昭和56年度において実施することとなった。その内容は延長 1485.5 m、総面積約 12,000 m²の大規模な工事計画である。この連絡を受けた富田林市教育委員会は、工事を担当する市建設部上木課と、ただちに埋蔵文化財に関する協議に入り、結果として、富田林市文化財調査会の委員である、神戸商船大学教授 北野耕平を代表とする「嶽山遺跡発掘調査団」を組織し、本調査が委託されることとなった。

今回の調査対象は、嶽山道路（仮称）登り口から現道までの新設部分と、現道の拡幅切七部分で、特に拡幅部分については、龍泉寺に残されている伽藍配置図などから、旧坊院跡の遺構検出が予想されるところを含んでいた。

調査の目的は道路建設に先立つ事前調査であって、遺構、遺物を対象とする埋蔵

文化財の確認と、遺跡範囲の把握、および周到な注意を払った記録保存を行なうことであった。調査は盛土工法が採られる現道部分を除き、とりあえず拡幅にかかる切土部分の全面発掘を中心に行ない、新設部分については、道路予定地に直角となるような形で、10m間隔のトレーナーを設定し、遺構の有無を確認するという方法をとることとした。昭和56年8月、富田林市長と嶽山遺跡発掘調査団は調査委託契約を締結し、これをうけて、ただちに発掘届けを提出、大谷女子大学講師 中村 浩を現地調査の担当者として調査を開始した。
(山野茂敷)

2. 調査組織および経過

嶽山道路新設、拡張に伴う埋蔵文化財の調査について、既述のごとき経過によつて、「嶽山遺跡発掘調査団、(以下調査団と略記す)」に委託された。これにより、昭和56年8月13日から9月30日までの予定で、発掘調査を実施することとなった。

調査にあたつての調査組織の編成は以下に示した如くである。

調査主体 嶽山遺跡発掘調査団

調査団長 北野耕平（市文化財調査会考古学担当委員、神戸商船大学教授）

調査主任 中村 浩（大谷女子大学講師）

調査員および補助員

中辻 亘（富田林市教育委員会）、夏原信義、樋口美樹子、西野 修、
青木昭和。

森下牧子、森島由貴、井山温子、松田智子、宮内尉久子、小西益子、細
谷知代、藤野辰美、菅原 環、その他大谷女子大学考古学研究会員諸姉
の参加をえた。

調査事務担当、富田林市教育委員会、社会教育課。

重機および作業補助 （株）松本建設（社長 松本晃一）

調査協力 樋口吉文（堺市教育委員会）、今村道雄（大阪府教育委員会）

その他、地元の方々の好意ある協力をえた。

調査は、道路工事の工区割に従つて、新設部分たるI工区はI区、拡張部分たるII工区はII区として実施した。さらに詳しい各区内の地区名については、後章で触

れることとするが、I区は第1～20トレンチ、II区はA～F地区である。発掘調査は、当初用地問題が未解決であったI区およびII区のF区を除いたII区の全面調査該当個所について着手した。その結果、B、C、D、E地区で遺構、遺物を、A地区では遺物のみを各々検出した。その後、用地問題の解決によってF地区的調査に着手し多数の遺構および遺物を検出した。これらII区の大半は、F地区など一部を除いて8月下旬には調査が終了した。

I区については、8月下旬に着手し、トレンチ設定による遺構、遺物の確認につとめた。しかし当初予定された10m間隔のトレンチ設定は、地形や立木の関係から不可能であった。同時に道路幅までの拡張も前述の如き制約から断念せざるをえなかつたのは不本意といわざるをえない。これら制約の中で、最終的に20ヶ所のトレンチを設定し、それぞれ後述する如く、予期以上の成果をえるところとなった。

とくに第6、7トレンチからは縄文時代に属する遺構、遺物が新たに確認された。この外、各トレンチからも炉跡、ピットなどの遺構、須恵器、陶磁器などの遺物を検出したことは注目される。ともあれ、現地における発掘調査は9月20日に完了し、以後、大谷女子大学資料館において出土遺物の水洗作業、実測、写真撮影などの遺物整理作業を実施し、10月31日一応の終了をみた。その後、報告書の編集作業を行い11月中旬、その全てを印刷社に渡しあえた。

以下に、発掘調査の経過を日を追って記述し、そのあらましについての記述としておきたい。

3. 日誌抄

- 8月13日 第II区B地区第1～第3トレンチ、C地区第1～第3トレンチ、D地区第1～第6トレンチ設定をする。遺物はC地区、石鎚、D地区、屋瓦片などがある。
- 8月14日 B地区第4トレンチ設定をする。C地区第1次掘削、平行して遺構検出。溝状落込みを確認。D地区表土除去、平行して遺構検出。ピット2個を確認。E地区表土除去を行なう。
- 8月15日 B地区第5トレンチを設定。C地区第1次掘削を続行、平行して遺構

検出。ピット4個を確認。D地区東側部分の表土除去、及び表面精査。

E地区表土除去を続行。

- 8月16日 B地区第1～第3トレンチ表土除去続行。トレンチ間試掘。C地区実測。写真撮影完了。E地区表土除去を続行、平行して遺構検出。写真撮影。ピット内土砂除去。
- 8月18日 E地区実測。
- 8月19日 C地区北部拡張、及びV字構の実測。V字溝内土砂除去、及び周辺表面精査。
- 8月20日 B地区表面除去。C地区第2次掘削、写真撮影。D地区表面除去、及び表面精査。E地区溝、ピット内土砂除去。F地区トレンチ設定。
- 8月21日 B地区表土除去を続行。C地区遺構検出、及びピット内土砂除去。遺構検出。写真撮影。D地区表面精査。E地区溝内土砂除去、及び周辺の表面精査。写真撮影。F地区北側セクション実測、及び写真撮影。C地区～F地区にかけて平板測量。
- 8月22日 E地区実測。



fig. 1 調査の状況 (C地区, F地区)

- 8月23日 C地区表面精査。写真撮影、及び実測。午後から表土除去。D地区割つけ、及び実測。F地区遺構検出。
- 8月24日 B地区表面精査。C地区実測、及び写真撮影。F地区西部の拡張を開始。
- 8月25日 C地区遺構検出。周辺の表面精査。D地区南部にトレンチ設定。F地区西部拡張、平行して遺構検出。
- 8月26日 C地区第3次掘削、及び周辺の表面精査。D地区南部掘り下げ。北部拡張部にトレンチ設定。F地区中央部に南北トレンチを設定、及び表面除去。
- 8月27日 C地区第3次掘削続行。E地区トレンチのスケッチ。写真撮影。本日をもって調査終了。F地区ピット内土砂除去、遺物とりあげ用の略測図を作成。
- 8月29日 B地区排土を搬出。C地区表土除去完了。南斜面に焼土検出。F地区前日の雨のため、排水作業、及び溝、ピット内土砂除去を続行。
- 8月30日 D地区北部トレンチ平板測量、及び実測。F地区略測図完成。遺構の精査、及び写真撮影。
- 8月31日 A地区西よりトレンチを3本設定。D地区北部トレンチ表土除去。南部落込み部の表面精査。F地区遺構にチョークを入れ、現状の写真撮影割りつけ。
- 9月1日 A地区前日のトレンチの表土除去を完了。東よりトレンチを2本設定。写真撮影。D地区北部トレンチ精査。写真撮影。F地区実測。
- 9月2日 I区の調査を開始する。西からトレンチナンバーを1～5とし、表土除去を行なう。午後より第6、第7トレンチを設定し、表土除去を行なう。D地区南部落ち込み部実測。F地区実測続行。
- 9月3日 I区第2、第3トレンチ写真撮影。第6、第7トレンチ遺構検出。第8、第9トレンチ表土除去。D地区北部トレンチ実測。F地区実測完了。
- 9月5日 I区第1～第5トレンチ平板測量。第6、第7トレンチ表面精査。第10～第15トレンチ表土除去。

- 9月6日 I区第1～第5トレンチ平板測量完了。第4，第5トレンチ写真撮影。
第16～第18トレンチ表土除去。
- 9月7日 I区第6トレンチ表面精査，写真撮影，東拡張部表土除去。第7トレンチ写真撮影，東拡張部表土除去。第8トレンチ表土除去。第19トレンチ表土除去。II区F地区遺構実測，及び写真撮影。
- 9月8日 I区第6トレンチ実測，及び南拡張。第8トレンチ表土除去。第9，第10トレンチ写真撮影。第14トレンチ遺構検出。第17トレンチ遺構検出。瓦，陶磁器，上師器，瓦質土器出土。第18トレンチ表土除去完了。第19トレンチ表土除去続行。
- 9月10日 I区第1，第2トレンチ実測。第3トレンチ表面精査。第6，第7トレンチ拡張部表土除去。第19トレンチ表面精査。雨のため，午後3時頃より作業中断。
- 9月11日 I区第1～第5トレンチ写真撮影。第3，第6，第7トレンチ実測。
- 9月13日 I区第8～第12トレンチ実測。II区B地区表土除去。C地区表面精査。
- 9月14日 II区B地区表土除去，及び周辺の表面精査。F地区南側地区ピット内土砂除去。
- 9月15日 I区第6～第14トレンチ平板実測。第13～第19トレンチ実測。II区B地区表面精査。C地区割りつけ。F地区南側地区表面精査。
- 9月16日 II区C地区実測。F地区南側地区割りつけ。
- 9月17日 II区C地区，F地区実測完了。
- 9月18日 I区第6～第15，第20トレンチ写真撮影。II区B地区写真撮影。F地区南側実測完了。写真撮影。
- 9月19日 I区第20トレンチ割りつけ，及び実測。II区B地区実測。
- 9月20日 I区第15～第19トレンチ平板図完了。第20トレンチ実測完了。II区B地区実測完了。

(樋口，中村)

第2章 遺構

1. 概観

道路の工事計画に従って、I、II工区という呼称を採用し、各々 I 区、II 区とした。I 区は新設道路に伴うものであり、トレンチ設定による範囲確認を主眼においた調査を実施した。トレンチは、既設道路に近い方から 1, 2 ……とし、合計 20ヶ所のトレンチを設定した。なお各トレンチは原則として予定道路幅としたが、地形や立木の関係で縮小をよぎなくされたものも少なくなかった。

II 区は、既設道路の拡張にかかるもので、いずれも曲線部分に該当する。調査は、南から A 地区、B 地区……E 地区とし、龍泉寺駐車場に接する部分を F 地区と呼称して実施した。調査は該当地の全面にわたって排土を行い遺構の検出に努めた。

検出された遺構は、以下順を追って記述することとするが、I 区、II 区ともに予期以上の成果をえた。

2. I 区の遺構

第1 トレンチ

ほぼ南北方向に設定した全長 4.3 m、幅 2.4 m、最大深 48 cm をはかるトレンチである。層序は耕土、黄褐色粘質土、灰褐色粘質土の順であり、地山は灰黄色を呈する礫質土である。遺物は土師質土器、陶磁器、サヌカイト（石器用材）が出土している。

第2 トレンチ

第1 トレンチの東 17 m に設定した全長 11.24 m、幅 2.27 m、最大深 30 cm をはかる、南北方向のトレンチである。丘陵斜面のため、わずかに傾斜を認める。層序は表土、暗灰黄色粘質土の順で、地山は第1 トレンチと同じである。遺物は確認されなかった。

第3 トレンチ

第2 トレンチの東 6 m に設定した全長 13.43 m、幅 2.06 m、最大深 34 cm をはかる南北方向のトレンチである。第2 トレンチ同様、わずかに傾斜を認める。層序は北

部では表土直下が地山であるのに対し、南端部では2～3層の堆積層を数える。遺物は検出されなかった。

第4トレンチ

第3トレンチの東10.6mに設定した全長7.08m、幅2.3m、最大深96cmをはかる南北方向のトレンチで、これもゆるい傾斜を認めるものである。層序は表土、暗赤褐色土、暗褐色（やや暗）土、暗褐色（やや明るい）土、暗黄褐色土、暗黃灰色土の順である。遺構は溝、ピットを検出している。遺物は土師器が大半で、他に瓦器、陶磁器のいずれも破片の出土をみている。

第5トレンチ

第4トレンチの東8.2mに設定した全長5.38m、幅2.1m、最大深94cmをはかる南北方向のトレンチである。これも、第1～第4トレンチと同じく、ゆるい傾斜を認める。層序は表土、暗赤褐色土、暗褐色（やや暗）土、暗褐色（やや明るい）土、暗黄褐色粘質土、暗黃灰色土の順である。溝、ピットとみられる遺構を検出している。なお、これらの遺構が果樹園耕作に伴うものかどうかについては明らかではないが、層序的には時代的に遡りうるものではない。遺物は出土していない。

第6トレンチ

第5トレンチ東側、丘陵中腹に設定した全長18.36m、幅4.6m、最大深70cmをはかる、南東～北西方向のトレンチである。地山面は北から、ほぼ一定のレベルで続き、14.5m付近より、ゆるやかにたちあがり、斜面をなしている。層序は灰黄褐色土、淡灰黃褐色土、暗灰褐色土、黃茶褐色疊混り土の順で、ピット状を呈するお

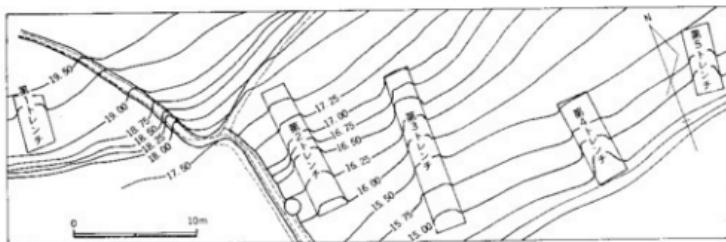


fig. 2 第1～第5トレンチ地形測量図

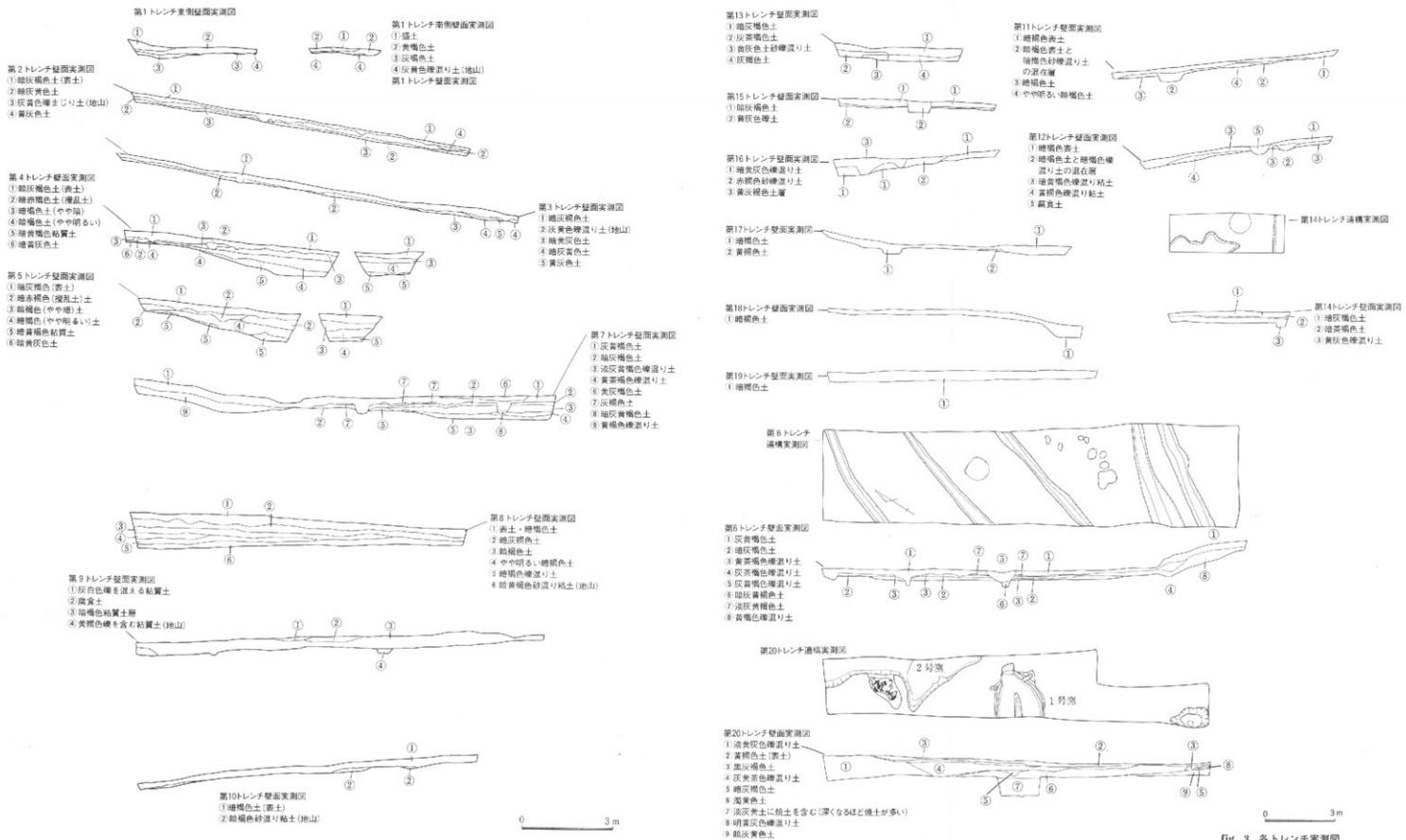


Fig. 3 各トレンチ実測図

ちこみや層序の搅乱がところどころに見られる。これらはいずれも、樹木による搅乱の可能性が濃い。

遺構としては地山面に掘り込んだ形の溝、炉跡を確認している。遺物は須恵器、土師器、瓦器、陶磁器、瓦が出土。

第7トレンチ

第6トレンチの東13.6mに、ほぼ平行して設定した、全長14m、幅2.2m、最大深80cmをはかるトレンチである。地表面から地山上面までの深さは北端では80cm、南端では50cmである。地山面は9m付近から、ゆるやかにたちあがり、わずかに斜面をなしている。層序は黄灰褐色土、灰褐色土、暗灰褐色土、暗灰黄褐色礫混り土、黄茶褐色礫混り土の順で、樹木の搅乱と思われるピット状の搅乱が、数ヶ所に見られる。遺構は確認できなかった。遺物はサスカイト（石器用材）、須恵器、瓦、陶磁器が検出されており、とくに石器の出土が顕著で注目される。

第8トレンチ

第7トレンチの東約7mに設定したもので、全長11.2m、幅2.2m、最大深1.18mをはかる、ほぼ南北方向のトレンチである。地表面から地山面までの深さは、北端1.18m、南端54cmで、わずかに斜面をなしている。層序は表土、暗灰褐色土、暗褐色土、やや明るい暗褐色土、暗褐色礫混り土、暗黄褐色砂礫混り粘土層（地山）の順である。遺構は確認されていないが、遺物は土師器、瓦器、須恵器破片が出土している。



fig. 4 第6～11トレンチ地形測量図

第9トレンチ

第8トレンチより東へ20.88m, ゆるやかな谷をこえた丘陵下腹部域に設定した, 北西～南東方向のトレンチである。全長13.8m, 幅2.2m, 最大深42cmをはかる。地山面は, ほとんど傾斜がなく, 地表面から地山面までの深さは北端で30cm, 南端で40cmをはかる。層序は表土のみの一層で, 遺構の検出は見られなかった。遺物は, わずかに陶器片が出土しているだけである。

第10トレンチ

第9トレンチの東13.6mに平行して設定した, 全長11m, 幅2m, 最大深36cmをはかるトレンチである。地山は暗黄褐色砂礫混り粘質土で, 地山面は北にむかってゆるやかに上がっていく形の傾斜面を構成している。層序は表土(暗褐色土)一層のみである。遺構, 遺物については全く検出されてない。

第11トレンチ

第10トレンチの東9.2mに設定した, 第8, 9トレンチとはほぼ平行に位置するトレンチである。全長10m, 幅は北端が3m, 南端が2m, 最大深60cmをはかる。層序は表土, やや明るい暗褐色土の順である。2層目に, 表土と, 暗褐色砂礫混り土の混在上の落ち込みが見られる。地山面は第10トレンチと同様に, 北にむかって上がりていき, ゆるやかな傾斜面をなしている。また, 表土から地山面までの深さは南北端とも20cm余りをはかる。遺構, 遺物については, 全く検出されていない。

第12トレンチ

第11トレンチ東, 道路予定地の西側に設定された, 全長9.5m, 幅3.2m, 最大深46cmをはかるトレンチである。地山面は北へいくに従って, ゆるやかにのぼり, 第10, 11トレンチと同様, わずかな傾斜面をなしている。層序は表土と暗黄褐色砂礫混り土の2層に大別され, 第1層には腐食土, 第2層には表土と暗黄褐色砂礫混り土の混合土を含む落ち込みがそれぞれに認められる。これらはいずれも, 樹木による搅乱と思われるものである。遺構, 遺物については, 第10, 11トレンチと同じく, 全く検出されなかった。

第13トレンチ

第12トレンチの北東12.3mに設定した, 全長5.5m, 幅2.8m, 最大深60cmをは

かるトレンチである。平坦地にあるので、地山の傾斜はほとんどなく、地表面から地山までの深さも、50cm前後と一定している。層序は表土、灰茶褐色上、黄灰色土砂疊混り上、灰褐色土の順である。遺構、遺物は検出されていない。

第14トレンチ

第13トレンチ北側18.2mのところに設定した、全長5.24m、幅2.5m、最大深60cmをはかる、北東～南西方向のトレンチである。地山面はほとんど傾斜がなく、地表面から地山面までの深さも50cm前後とほとんど一定している。層序は、表土、暗

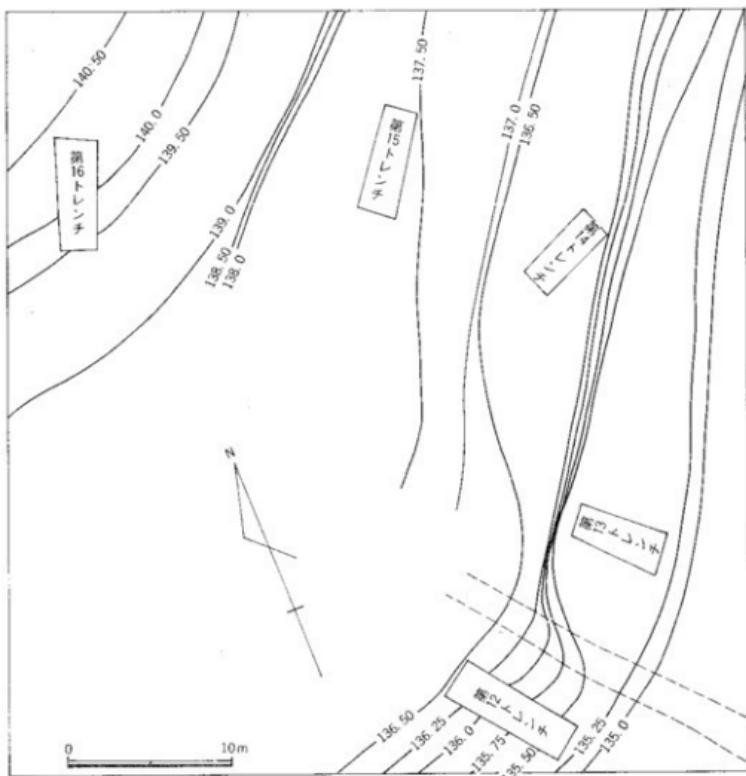


fig. 5 第12～16トレンチ地形測量図

茶褐色土、黄灰色礫混り土、の3層に分けられ、3層目の西端は落ちこんでいる。遺構については、トレンチ南側より炉跡、南西端には南西にのびると思われる溝が一部検出されている。遺物は全く出土していない。

第15トレンチ

第14トレンチの北西12.3mに設定された、全長6.8m、幅2.8m、最大深50cmをはかる、ほぼ南北方向のトレンチである。地山面は一定しており、地表から地山までの深さは40cm前後である。層序は表土と黄灰色礫土の2層で、黄灰色礫土が、表土に入り込んだ形になっている。遺構、遺物については、何等検出されなかった。

第16トレンチ

第15トレンチの西19.6mに設定された、全長7.2m、幅3.1m、最大深74cmをはかる、ほぼ南北方向のトレンチである。地山面は南から北にむかって上がり、わずかに傾斜面を成している。地表面から地山までの深さは、南端が74cm、北端が30cmである。層序は黄灰褐色土、赤褐色砂礫混り土、暗黄灰色礫混り土、に分けられる。遺構は上壙状のおちこみが検出された。遺物については、土壤より軒丸瓦などの瓦片が出土している。

第17トレンチ

第16トレンチの西側に位置する、全長10.8m、幅2.4m、最大深50cmをはかる、北東～南西方向のトレンチである。地山面は北から南に向って、わずかに下降しており、地表面と地山面までの深さは北端で20cm、南端で38cmである。層序は表土と黄褐色土の2層のみであった。遺物は、不整形な形を呈する上壙より、黒色瓦質土器、瓦、陶磁器が出土している。

第18トレンチ

第17トレンチの西7.8mにほぼ平行に設定された、全長11m、幅3m、最大深56cmをはかるトレンチである。地山面もほぼ一定しているが、北端から9mのところより落ちこんでいる。地表面から地山面までの深さは、北端では18cm、南端では54cmであった。遺構、遺物については検出されていない。

第19トレンチ

第18トレンチの東10mに設定されたもので、第17、18トレンチとほぼ平行に並ぶ

トレンチである。全長11.14m、幅2m、最大深44cmをはかる。地山面はほぼ一定しており、地表面から地山面までの深さは、北端28cm、南端40cmである。層は表土のみの一層になっている。遺物は、土壤より軒丸瓦（巴文）瓦器、土師器、陶磁器の出土をみている。

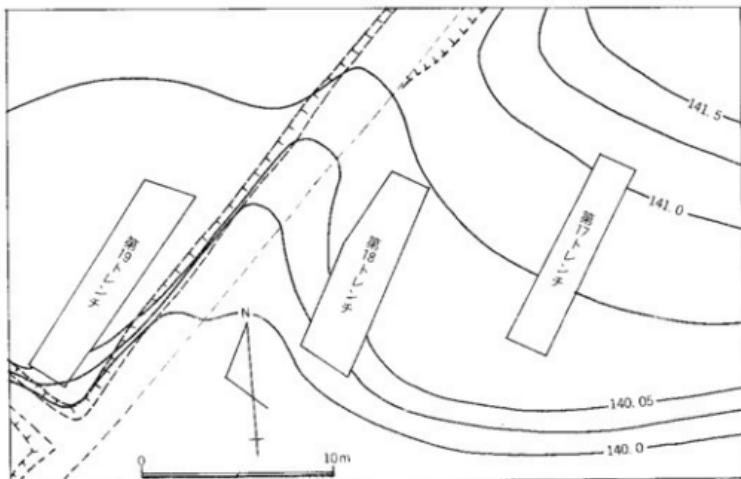


fig. 6 第17～19トレンチ地形測量図

第20トレンチ

I区とII区の境、新設道路予定地と交差する部分に、最終段階で設定された、ほぼ南北方向のトレンチである。全長16.7m、幅2.8m、最大深1.6mをはかる。地山の傾斜はほとんど見られない。遺構については、トレンチ中央附近で遺存状態の良好な窯跡を一基、さらに東端部で炭灰および焼土を含む窯の痕跡を確認した。前者を1号窯、後者を2号窯と呼称して記述を進める。1号窯は南北に2m、東西に2.2m、壁面のたちあがり64.4cmの馬蹄形をなすものである。2号窯と呼称したものは、南北1.08m、東西に1.4m、壁面のたちあがり6cmの不定形の窯跡が検出された。いずれの遺構内にも炭の堆積が見られるが他には殆んど遺物がみられない。恐らくは近世以前の炭焼き窯と考えられるが、1号窯の上層堆積土中からは、瓦質

土器、陶器片が採集されており、土器窯の可能性も全面的には捨て切れない。

(井山、橋口、中村)

3. II区の遺構

A地区

丘陵の尾根鞍部に近い斜面であり、遺構の存在については地形的に若干問題がないわけではなかった。しかし地名（字名）は「ツカンドウ」であり、何らかの遺構存在の可能性を全く否定することも困難であった。従って遺構存在の有無を確認すべくトレンチを設定した。その結果、地表面から地山面までは、各トレンチともにわずかに一層であり、何ら遺構を検出しないことが明らかとなった。その後、念のため全面排土を注意深く実施したところ、上釜口縁部などの少數の遺物を採集した。この遺物は、当該斜面の東方に位置する台地から落としたものと考えるのが自然であり、先述の地名に因む遺構は、この台地面に所在している可能性がきわめて濃いものと思料される。また果樹園内の一帯にトレンチを設定したが、何ら遺構、遺物を検出することは出来なかった。

B地区

A地区の北約80mに位置する果樹園が対象地である。字名は「コマンダ」と称し、かつて龍泉寺領の小水田が位置した地域である。寛文年間の龍泉寺藏絵図によると

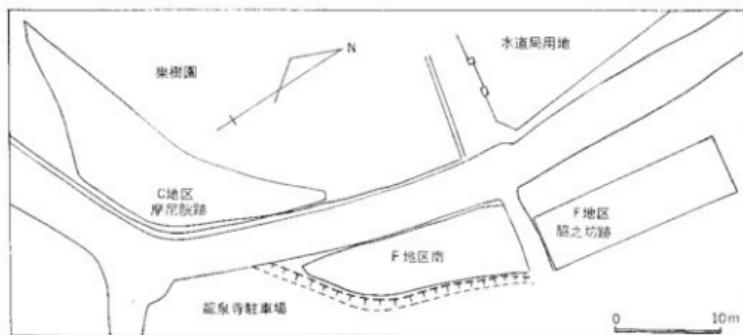


fig. 7 調査区配置図

「前之坊」の故地とされる部分に該当する。

調査は表土除去後、注意深く遺構面の検出をはかったが、その多くが耕土除去後ただちに地山面たる岩盤質となり、開墾に伴う削平の著るしさを改めて認識させられた。わずかに遺構としては溝3、土壤2を確認したにすぎない。このうちSD 03、04、05溝は水田排水に供されたものであり、時代的には新しい。またSK 02、06土壤、SD 01溝は、開墾に先行するものとはいえ、その用途、性格についての手がかりは全く認められない。SK 02土壤は径 1×1.4 m、深さ0.3mをはかる不整形なもので人為性の濃いものである。SK 06土壤は径 2.6×1.2 m、深さ0.6mをはかる長方形を呈するものである。SD 01溝は幅1.6m、深さ0.3mを各々はかり、SD 03溝に平行する排水溝と重なっている。遺物は、瓦、土師質土器、瓦器、陶器などが検出されている。いずれも細片化しており、特筆に値するものは少ないといえよう。

C地区

龍泉寺駐車場の西に位置する部分で、B地区の東、F地区の西に各々接する地域である。調査部分が道路のカーブの拡張にかかる部分であるため三ヶ月形の範囲となっている。調査の結果、建物4、溝2、土壤3、不明遺構2の11ヶ所の遺構を検出した。

建物は、南東隅を確認したSB 01、02、03建物、北西隅が不明なSB 04建物の4棟分であり、いずれも礎石を伴わない掘立柱構造のものである。SD 01建物は、東西あるいは南北方向の建物で、南東隅柱を含んで3個の柱穴を検出した。柱穴間の距離は、東西1m、南北0.8mを各々はかる。SB 02建物はわずかに西に偏した主軸を有する建物で、SB 01建物同様3個の柱穴を検出した。このうち

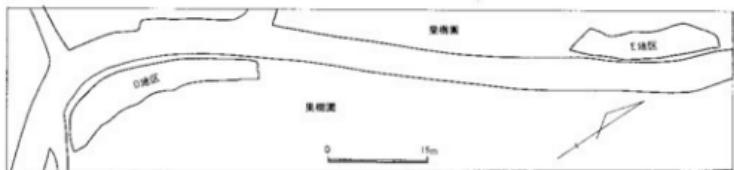


fig. 8 調査区配置図

東側の柱穴はSB01建物と共有する。柱穴間の距離は、東西1m、南北1.2mをはかる。SB03建物はSB02建物より著しく偏っており南東方向の建物である。8個の柱穴を確認しており、前二者よりも柱穴間の距離は0.75mと短い。南側、東側ともその距離は、ほぼ等しい。また南東隅の柱穴はSD6溝によって、おそらく削平されたものと考えられる。SB04建物は3×3間の東北方向の建物と考えられる。柱間の間隔は、南側で1.4m、東側で1.6mを各々はかる。

溝はSD5、6溝の2ヶ所であるが、両者はSD6溝の上層にSD5溝が構築されるという前後関係を有する。SD5溝は、幅1.4m、深さ0.16mをはかるU字溝で流水方向は東である。SD6溝は幅2.2m、深さ0.19mをはかるU字溝で、SD5溝に比較して、その幅は一定していない不規則なものである。建物を含めた前後関係は、SB03建物が廃絶後SD6溝が存在し、SB02建物が廃絶後SD05溝が存在したものと考えられ、SB01溝とSD5溝の関係は併行していた可能性が十分考えられる。なおSD5溝内より青磁片が出土している。

土壤は、3ヶ所みられるが、それらの時期的前後関係、性格は不明である。ただSX10、SX11不明造構については、後者が焼土を伴うこと以外、その性格を明らかにする遺物などは認められない。

遺物には特筆すべきものとして銅製の錫杖がある。これは小型のもので、恐らく仏像の持物であったと考えられる。その他輸入磁器、瓦器、陶器などの出土がある。また上層でサヌカイト製石鎌が1点出土しており、当該地域の歴史の古さを示しているものとして注目されよう。

D地区

龍泉寺の西側にひろがる嶽山山麓の東側斜面に位置するもので、C地区の北西約150mになる。既設道路のカーブの拡張部分に該当し、三ヶ月形の調査区となっている。調査の結果は、5個のピットを検出したのみで、それが何の用に供されたものかは全く不明である。遺物は瓦片などが少量採集されたにすぎない。

D-E地区内トレンチ

D地区の東北に「ゴイヤマ」と称する小丘があり、地元では古墳であるとのいい伝えがある。この部分の西端を拡張部が通るため幅1m、長さ9mのトレンチを設

定して検討したが、何ら遺構を検出することは出来なかった。

なお調査と平行して、その小丘を地主谷口氏の許可をえて平板測量を実施した。これによるとこの小丘は、上部の大半が削平されているとはいえ、一辺20m前後の方形墳となる可能性が濃いことが判明した。このことは、とくに南西隅および南東隅での形状によくあらわれているだろう。

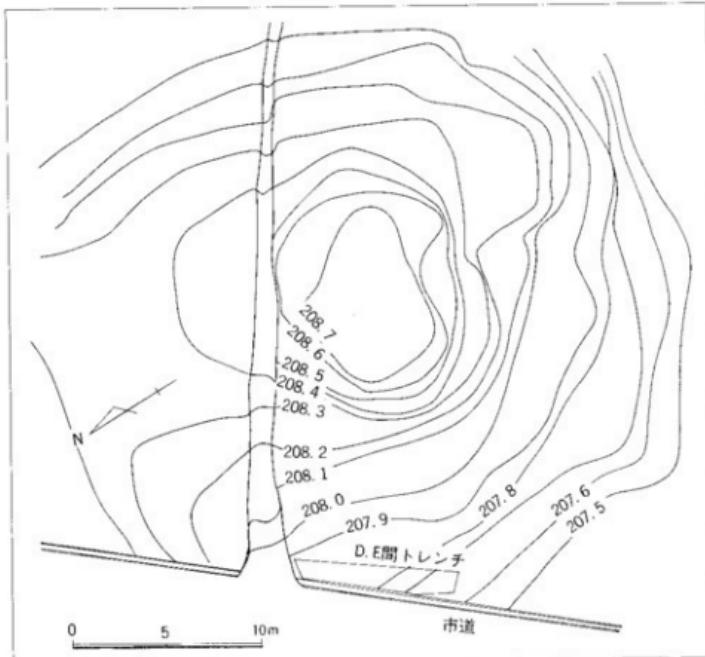


fig. 9 「ゴイヤマ」測量図

E 地区

D地区の北東80mに位置する。国指定名勝・龍泉寺庭園の借景たる丘陵部分に接する部分でもある。調査の結果、幅50cm、深さ10~30cm前後の西北から東南方向へはしる溝を4基、ピット9個を検出した。これらはいずれも開墾に伴うものと考えられ、溝内からは現代の遺物も採集された。

F 地区

F 地区は、既設道路の拡幅による部分で、かつて大阪府教育委員会が調査し、報告している「千手院」跡と西部で接している。寛文絵図によると「脇之坊」とされる部分で、当初から十分遺構の存在が予期された場所でもあった。

調査は、表土、耕土を除去すると全面に水田の床土がみられ、その直下から遺構面が検出された。すでに水田開墾のため各ピットの遺存度は、良好なたちあがりを有するというものではなかったが、十分旧状を想定するに足る状態であった。検出された遺構は、建物 7、溝 2、土壙 2 で、その他関係を求めるのが困難な不明ピットも多数確認した。以下各遺構について記述することとする。

S B 0 1 建物は西側面が確認されたもので 3 間 × 3 間以上の柱間を有する。その規模は西側で 8.8 m をはかり、柱穴間の間隔は、西側面で 3 m、南側で 1.5 m をそれぞれはかる。S D 1 0 溝の上部を通る形での構築であり、規模としては検出建物中最も大きいものである。

S B 0 2 建物は、S B 0 1 建物の北半分におさまるような小型の建物である。S B 0 1 建物同様西側面のみの確認であり、その延長は 4.2 m、柱間は 4 間 × 4 間以上となり、そのそれぞれの間隔は不整いであるが、西側で 1 ~ 1.5 m、南側で 1.8 m、北側で 2.1 ~ 2.4 m をはかる。S D 1 0 溝の北側にあり、その溝によって区切られている感を与える。

S B 0 3 建物は、S D 1 0 溝を横切る形でつくられたもので S B 0 1 建物とほぼ方向では平行する。西側面の延長は 4.5 m、柱間は 4 間 × 5 間以上で S B 0 2 建物と同様な規模・構造を示す。柱間の間隔は西側で 0.8 ~ 1 m、南側では 0.9 ~ 1 m、北側では 1 m 前後を各々はかる。なお S B 0 1 建物と同一建物となる可能性を捨てきれないものである。

S B 0 4 建物は、検出遺物の中で最も方向が異なるもので、大きく偏っている。西側の延長 5.2 m をはかり 5 間 × 4 間以上の柱間を有する建物である。柱穴は S B 0 1 ~ 0 3 建物までのものを共用している可能性がある。西側の柱間間隔 1.6 ~ 1.8 m、北南側とともに 1.2 ~ 2.0 m をはかる。S D 1 0 溝を横切っており、切り合い関係や方向から最も後出段階のものと考えられる。

S B 0 5 建物は、S B 0 4 建物と同様、わずかに偏した建物である。柱間は西側で4間、南側で3間以上を数える。西側の延長は6.1mをはかる。柱間の間隔は西側で1.5～1.8m、南、北側ともに1.8mをはかる。恐らくは、S B 0 4 建物と同様、後出段階のものと考えられる。

S B 0 6 建物は、S B 0 2 建物の南側に位置する建物である。西側面の延長は7.9m、柱間は4間×3間以上を有する。柱間の間隔は西側で2.1m、南北側ともに1.5mを各々はかる。

S B 0 7 建物は、S B 0 6 建物と方向ではほぼ平行する。西側面の延長は6.9m、柱間は3間×2間以上である。柱間の間隔は西側で2m、南側では1.5m、北側では2.1mを各々はかる。

S B 0 8 上塙は、東西0.8m、南北0.7mをはかる楕円形の土塙で、内部には瓦片が認められた。S B 0 6 建物の南、脇之坊の建物跡の南端に位置する。

S K 0 9 土塙は、東西0.9m、南北0.8mの楕円形の上塙で、瓦片を数点有する。S B 0 2 建物内の南部に位置している。

S D 1 0 溝は、幅0.3m、延長4mをはかる東西方向のU字溝である。建物の雨落ち溝とも考えられよう。

S D 1 1 溝は、幅0.3m、延長16mをはかるU字溝である。S D 1 0 建物の中程で東端が直交するものである。S D 1 0 建物と同様建物に伴う雨落ち溝としての用途が考えられる。

F地区南

F地区の南部域に一段高く連なるものがある。C地区の東端に該当しており、F地区よりもC地区との関連を求めるのが容易である。

調査の結果、杭列1、溝1、土塙1、井戸1、道状遺構1を各々検出した。

S A 0 1 杭列は南北に連なるもので4個のピットから構成される。ピットの径は35cm～50cmをはかる。恐らくはC区の建物とさらに東側にひろがる地域とを境界するものと考えられる。

S K 0 2 上塙東西2m、南北1mをはかるピット2個が連なったような不整形な形を呈する土塙である。S E 0 3 井戸は、調査区域の北端に位置した径1.15mを

はかる円形の素掘りの井戸である。S X 0 4 道状遺構によって切られている。

S X 0 4 道状遺構、F 地区との境界にみられるもので、恐らくは坊院内の道路として用いられたものと考えられる。S D 0 5 溝、幅 0.4m をはかる東西方向の溝である。おそらくは開墾に伴うものであろう。

4. 小 結

以上、I、II 区のトレンチおよび調査区域で検出された遺構について記述してきた。これらをみると、時代的に、ほぼ縄文、古墳、奈良～平安、鎌倉～室町、近世以降と大別される。とくに縄文、古墳時代の遺構は、現在のところ確認されていないが、周辺地域との関連を考慮すれば、その存在が十分想定しうるものである。また奈良時代以降のものについては、いずれも龍泉寺とのかかわりで、とらえられるものであり、既述の如く、II 区に集中するのは当然ともいえよう。すなわち I 区が先史～原史の遺構遺物の散布、II 区が有史（歴史）時代のそれが濃密であり、この点明瞭に区分が可能ではないかと思う。

I 区では第 4、7、8 トレンチで石器、とくに第 7 トレンチでの検出量が多く注目されよう。第 7 トレンチ周辺は比較的広い平坦面がひろがっており、十分遺跡の存在が考えられるところであり、今後に期するところは大きい。これと同様に第 4、6、8、16、17、19 トレンチでも多量の遺物が採集されており、併せて留意るべきであろう。なお第 20 トレンチでの窯跡も、炭焼窯であったとしても、何ら資料的価値が減少するものではない。この点、当該地域の産業史究明のためにも細心の注意を払った調査が必要であろう。

II 区については、B、C、F 区で各々龍泉寺の坊院跡を検出している。これらは、いずれも拡幅部のため、坊院跡のごく一部の隅を確認したにすぎないが、それによってえられた成果は、大きいといわざるをえない。近年、中世の考古学が注目を集め、和歌山県の根米寺をはじめとする寺院跡の調査も盛んに行われつつあり、当該調査もそれと同列に律せらるべき性格のものと考えている。往時 23 坊といわれた龍泉寺の全体像の一端が、瞬時ではあるが我々の目前に現れたという点も、決して軽視るべきものではない。

（井山、樋口、中村）

第3章 遺 物

1. 概 観

今回の調査では、石器、土師器（土師質土器）、瓦器、陶器、磁器などの土器、陶磁器とともに、屋瓦、鉄製品、銅製品など多種多様なものの出土があった。これらのうち、とくに屋瓦については下記に示した如くⅡ区で集中的に出土しており、龍泉寺の坊院跡との関係がみられる部分からのものであることは注目に値するだろう。

出土地点	石 器	瓦	土師器	瓦 器	陶 器	磁 器	その他
A 区	0	10	0	0	2	4	8
B 区	0	42	28	4	6	3	45
C区表採	1	0	0	1	0	0	2
C 区	2	166	196	80	30	27	71
D 区	0	4	0	0	0	0	1
E 区	0	0	0	0	0	0	0
F 区	3	485	183	133	30	37	241
F区南側	0	202	15	3	4	15	57
第1トレンチ表採	1	0	3	0	1	3	1
第1トレンチ	0	0	0	0	0	0	1
第2トレンチ	0	0	0	0	0	0	0
第3トレンチ	0	0	0	0	0	0	0
第4トレンチ	2	2	17	6	2	0	7
第5トレンチ	0	1	0	0	1	0	0
第6トレンチ	0	4	1	2	2	1	9
第7トレンチ	17	13	8	0	2	2	16
第8トレンチ	1	0	5	5	4	2	14
第9トレンチ	0	0	0	0	0	0	1
第10トレンチ	0	0	0	0	0	0	0
第11トレンチ	0	0	0	0	0	0	0
第12トレンチ	0	0	0	0	0	0	0
第13トレンチ	0	0	0	0	0	0	0
第14トレンチ	0	0	0	0	0	0	0
第15トレンチ	0	0	0	0	0	0	0
第16トレンチ	0	15	0	0	2	0	2
第17トレンチ	0	2	0	0	1	9	2
第18トレンチ	0	0	0	0	0	0	0
第19トレンチ	0	5	13	9	1	1	17
第20トレンチ	0	0	0	0	0	0	1
不 明	1	40	22	6	9	8	39

table 1 猿山遺跡 出土遺物一覧

石器は、II区のC地区で検出した石鎌を除いては、大半のものがI区の各トレンチからのものであり、とくに第7トレンチは出土量が多い。時代的には、いずれも縄文期と考えられ、佐備川流域の当該時代を考える好資料であろう。

土師器については、ほぼ全域にわたっており、時代や用途を厳密に区別すれば、その差は明らかなものがあろうが、本稿ではとくに実施していない。この点、後考をまちたいと思う。

瓦器は、瓦と同様の傾向を示している。他の陶磁器については、占いものはII区の坊院跡に集中しているが、新しいものは、比較的散らばってみられる。

須恵器は、F区および第7トレンチで検出されており、C区では表面採集のものが若干みられるにすぎない。とくにF区は龍泉寺とのかかわりで奈良～平安時代、第7トレンチでは古墳時代のものであり、いずれも「陶邑」からの供給品であろう。

さらに注目されるものに、C地区出土の錫杖がある。これは青銅製の小型のもので恐らくは仏像の持物が落下し自然に埋蔵されたものと考えられる。この他、輸入磁器が若干点数出土しているが、それらはいずれもB、C地区の坊院跡からである。

ともあれ、多種多様な遺物が出土しているが、I区では、縄文時代、古墳時代と中世さらに比較的新しい時代のものを含んで出土しており、II区が中世、近世のものが中心となっているのとは対照的である。以下、出土遺物の各個について記述していくこととする。

2. 遺物各説

石器

今回の調査で出土した石器は、剥片・石核まで含めて31点あり、そのうち、狭義の石器は5点ある。剥片・石核をすべて紹介することは、紙幅の関係上行なわないが、実測図とともに観察表を作成したので後に掲示しておく。

ナイフ様石器 (fig 10-1)

横長剥片を素材とし、背面左側縁をフリーフレーキングによって刃部とする。剥片末端を截断し、平面形は長方形を呈する。

類例は、大阪府羽曳野市中谷遺跡などに見られるが、当例とは調整部位が異なる。しかし、その形状から考えるに、同様の性格を有するものとしたい。

中谷遺跡例は、「槍先形石器の器面調整によって生じた剝片」を用いたとされているが、嶽山で槍先形石器が作られたという事実は認められず、当例が二上山麓からもたらされた可能性が強い。

石匙 (fig 10-2)

横形で、一見三叉状を呈する石匙で、刃部は主にステップフレーキングによって内彎する刃を造り出している。ツマミは自然面を有効に利用して造り出され、体部からほとんどくびれずに続いている。

刃先がやや磨滅し、使用が想定される。

石鎌 (fig 10-3)

凹基無茎式とされるもので、主にフリーフレーキングで調整されている。脚部はそれほど長くなく、丸味をもつ。

全体に磨滅しており稜線がやや不鮮明であったので注意深く観察したが、作為的な研磨痕などはみられず、その他の要因、例えばローリングなどを考えるべきであろう。

不定形石器 (fig 10-4, 5)

(4)は、いわゆる横形削器とも呼ぶべき形態を呈する。数回の打撃によって剥離された横形剝片を素材とした凸刃削器で、ステップ、フリー両フレーキングの併用によってつくられている。

検出時の損傷によって一部欠損している。

(5)は、大部分を欠損し、全体の形が全くつかめないが、残された側縁に刃部が認められたため石器と認定した。刃部と考えられる部位はフリーフレーキングによって調整され、図の上から下に向かって順に剥離されている。

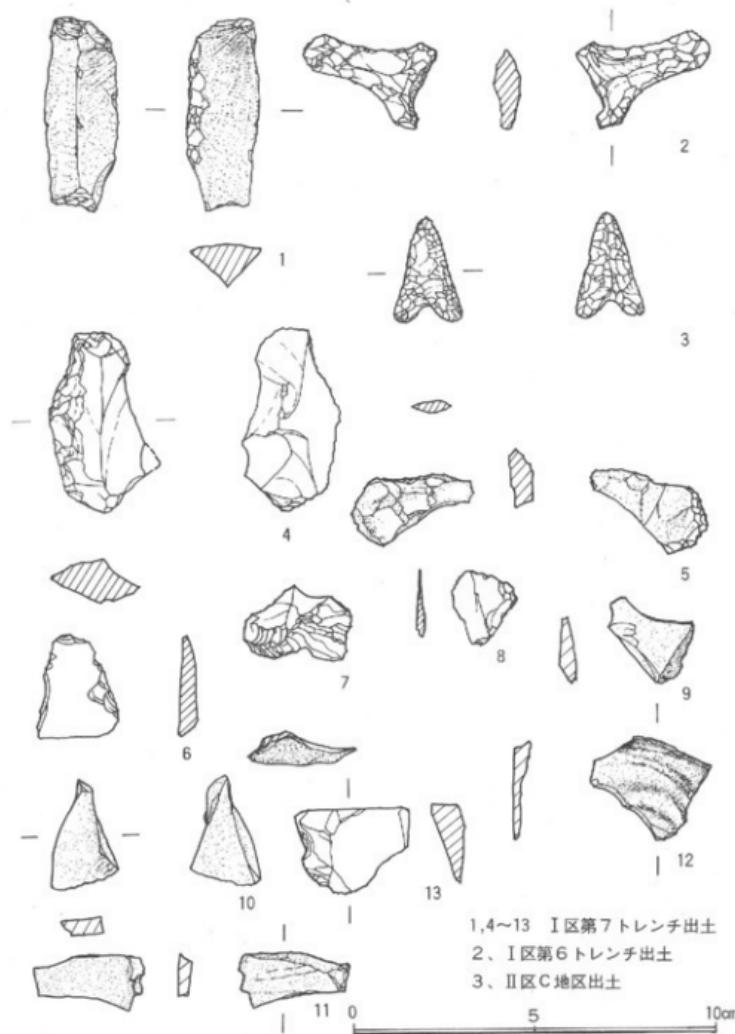
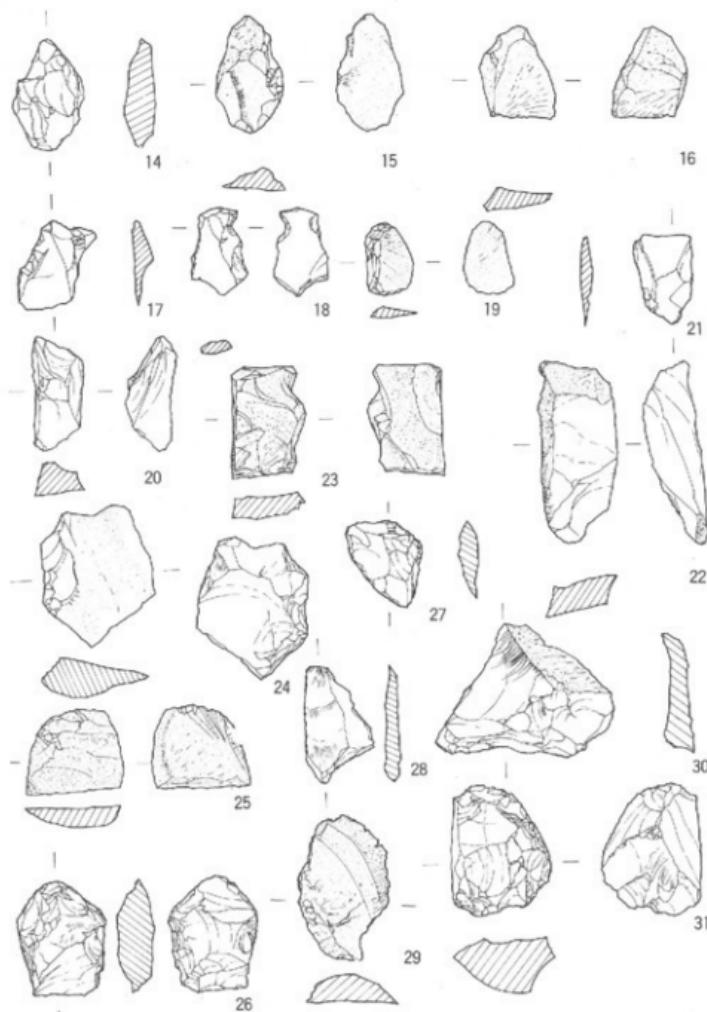


fig. 10 刻片, 石器実測図



14. I区第1トレンチ付近出土

15~22、24~27、29、31 I区第7トレンチ出土

21、30 I区第8トレンチ出土

28 I区第4トレンチ出土

fig. 11 剥片, 石器, 実測図

剝片・石核 (fig 10--6 ~ fig 11-31)

発掘方法にも制約があり、全ての剝片・石核を採集したわけがないため、主に比較的大型の剝片が検出されたのみで、細片などは全く不明である。先にも述べたとおり、すべて石材はサヌカイトであり、その性質から、個々の剝片・石核をたとえ数十片といえども観察しデータ化するには莫大な時間が必要である。なかには若干の考察を行ないたいものもあるが、今回は解説せず次の機会に譲ることにする。

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土地点	備考
1	5.2	2.0	1.1	12.6	第7トレンチ (LN3)	ナイフ様石器
2	3.3	1.0	0.7	4.7	第6トレンチ挖掘部第3層	石匙
3	2.9	1.8	0.3	1.7	C区第3トレンチ	石鎌
4	5.0	2.5	1.2	12.8	第7トレンチ	不定形石器(横形削器)
5	2.2	1.7	0.6	3.9	"	" (器形不明)
6	2.85	(2.2)	0.6	3.3	"	
7	2.9	1.85	1.0	3.1	"	風化著しい
8	1.85	1.7	0.2	0.8	第7トレンチ (LN13)	
9	2.25	1.7	0.45	2.0	第7トレンチ	
10	2.75	1.85	0.45	2.6	"	
11	3.05	1.5	0.35	2.5	"	
12	3.25	2.7	0.45	3.3	"	
13	3.15	2.3	0.8	5.4	第7トレンチ (LN3)	
14	(4.15)	(2.5)	(1.15)	11.8	第1トレンチ付近表探	新しい剥離が多く凹状ほとんどの現れない
15	4.45	2.5	0.8	6.8	第7トレンチ	風化著しい
16	3.45	2.65	0.8	7.9	"	
17	3.2	2.2	0.7	4.4	第7トレンチ (LN3)	
18	3.3	2.05	0.35	3.6	"	
19	2.75	1.7	0.4	2.4	第7トレンチ	
20	4.2	1.9	1.25	10.2	第7トレンチ (LN3)	
21	3.3	2.2	0.4	4.7	第18トレンチ表土	
22	6.65	2.85	1.1	30.3	第7トレンチ (LN3)	
23	4.1	2.7	0.8	16.1	第7トレンチ	
24	4.95	4.2	1.4	30.8	第7トレンチ (LN3)	
25	3.5	3.1	0.6	11.1	第7トレンチ	
26	4.2	3.3	1.3	22.0	"	
27	3.1	2.7	0.7	7.2	"	
28	4.4	2.5	0.55	9.5	第4トレンチ表土中	
29	5.4	3.4	1.0	19.3	第7トレンチ	風化著しい
30	4.8	5.7	1.0	49.2	第8トレンチ第3層	
31	4.9	3.7	2.0	42.3	第7トレンチ	

table 2 石核、剝片の計測値

須恵器 (fig. 12—1~7)

須恵器は脇之坊 (F 区) で 2 点、第 7 トレンチ (I 区) で 5 点の各々破片が出上している。前者は(2)径 5×9.3 、厚 1.2cm をはかるもので外面には粗な平行叩き、内面には同心円叩きが施されている。(1)は径 $3.2 \times 5.1\text{cm}$ 、厚さ 0.8cm をはかり、外面には細かな平行叩き、内面には同心円叩きが施されている。両者ともに壺の体部で奈良～平安時代に属するものと考えられる。後者は、径 $5.0 \sim 2.5\text{cm}$ 前後、厚さ 0.8cm 前後を各々はかる。外面は、各々細かな平行叩きであるが、(4)については、木目が浮き出て格子目のようにみえている。内面は、(3)がカキ目であるのを除いて、

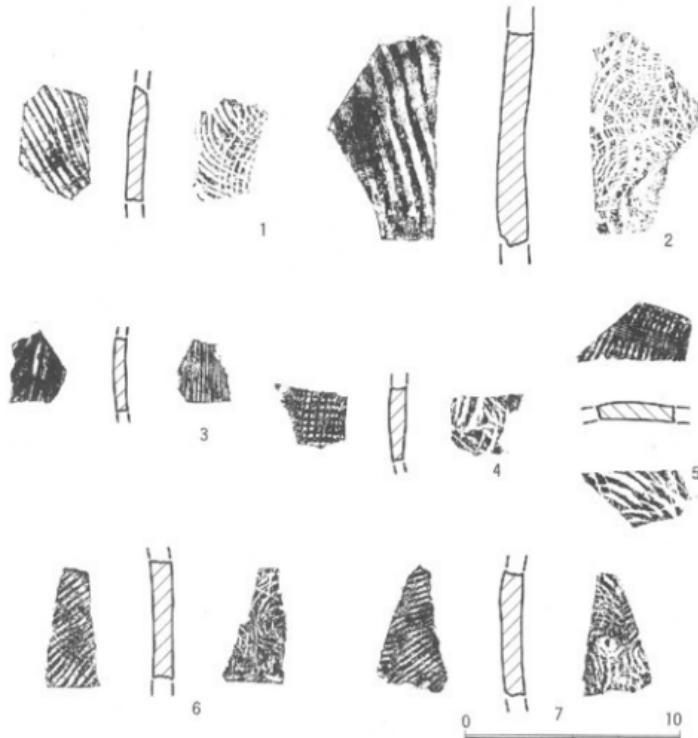


fig. 12 遺物実測図および拓影

他は同心円あるいは円弧叩きである。器種については(3)が不明であるが、他はいずれも壺あるいは壺である。とくに(5)は肩部に相当する部分である。古墳時代後期～奈良時代前期にかけての特徴を備えている。

土師質土器 (PL 6—1～12)

今回の調査で出土した土師質土器の器種は、主として小皿であった。口径は7.1cm～8.3cm、器高は1.2cm～2cmをはかる。これらは口縁部および底部の形状から、3種類に区分される。その1つは底部が平らで口縁部が直線的に上外方にのびているもの(1～6)、体部、口縁部とも全体的に丸味をおびているもの(9～10、12)、底部が丸く口縁部が直線的に上外方にのびているもの(11)である。これらはⅡ区のC地区、F地区より出土している。鎌倉～室町期のものであろう。

瓦器 (PL 6—13～25)

器種は椀と、椀から皿への過渡期と思われるものとの二種が出土している。前者(13～19、23～25)は、口径14～11cm、器高3.5cm前後をはかり、口縁部は内傾したのち外方へのびる形状を呈する。内面には雑な円状の暗文がみられ、外面には指おさえの痕がみられるものもある。後者(20～22)は口径11cm前後、器高2.5cm前後をはかり、内面には雑な円状の暗文がみられる。

土釜 (PL 6—26, 27, 28)

26口径18.9cmをはかり、白灰色を呈する瓦質の土釜である。口縁部はやや内傾し、突帯はほぼ水平にのびている。内面には丁寧な刷毛目調整、外面にはヘラ削り調整を施している。27口径24.9cmをはかり、黒色を呈している瓦質の土釜である。口縁部はやや内傾し突帯は長く水平にのびている。内面には、刷毛目調整が施されている。28口径22.5cmをはかる土師質の土器である。口縁部は内傾し、突帯はその先端で上方へ屈曲している。これも26、27と同じく、内面に刷毛目調整が施されている。

瓦質土器 (P L 7—1)

口径39cmをはかる白灰色を呈し、内面に刷毛目調整が施されているすり鉢が出土している。出土場所はII区のF地区である。

陶質土器 (P L 7—2~8)

ねり鉢と甕の二種が出土している。前者(2~5)は口径27cm~37cmをはかり、白灰色を呈する焼成の堅緻なものである。調整は内外面とも、ナデ調整を行なっているものが大半で、外面をヘラ削り調整しているものも見られる。甕(6~8)については、口径27cm~29cmをはかり、茶褐色を呈する軟質なものである。7, 8には内面に刷毛目調整が見られる。

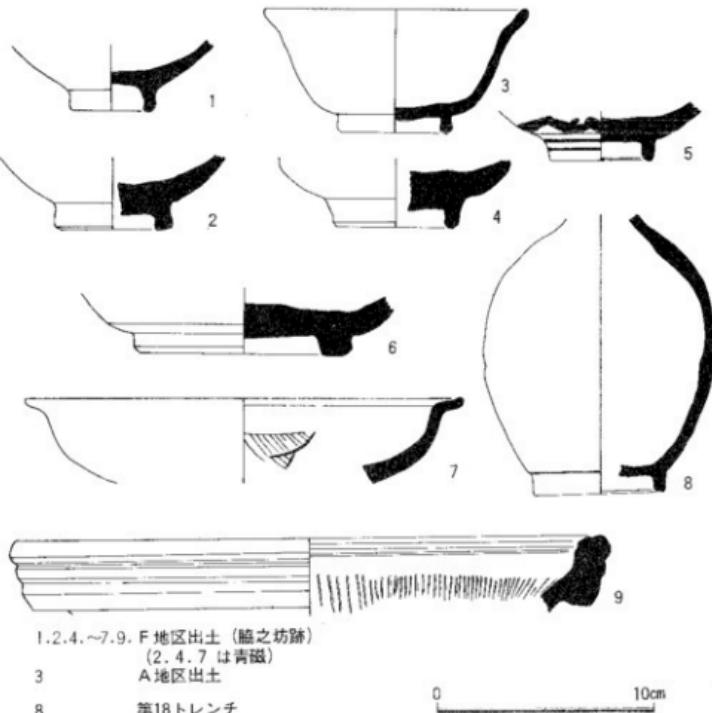


fig. 13 陶磁器実測図

磁器 (PL 7—9~15, fig 13—1~8)

(PL 7—9~15) は、口径 7~10cm, 器高 4cm~6cm の江戸末期のものと思われる古伊万里の網目茶碗である。II 区 C 地区, F 地区で、主に出上している。

磁器には中国から輸入されたとみられる青磁 (fig 13—2, 4, 7) と我国で生産されたとみられる古伊万里 (PL 7—9~15) さらに生産地不明の白磁、などがみられる。青磁は、碗の口縁とみられるものと鉢とみられるもの、さらに碗の底部があり、いずれも龍泉窯のものと考えられる。また盤状のもの (7) は、その産地が明らかでない。中国からのものであることは疑いないだろう。

屋 瓦 (PL 8—1~11)

- (1) 径 14.5cm をはかり、内区に巴文、外区に比較的大きい珠文を配する軒丸瓦である。巴の頭は大きく鍵形をなし、太くて短い。珠文は 16 を数える。
- (2) 径 14cm をはかり、内区に左まわりの方向の巴文、外区に 13 の珠文を配する鳥食である。飾板は薄い。
- (3) 径約 13cm をはかり、内区に巴文、外区に珠文を配する軒丸瓦である。丸瓦部は失われている。
- (4) 巴文軒丸瓦の破片である。(3)と同様のものであろう。
- (5) 径 14cm をはかり、内区に巴文、外区に珠文を配し、巴の頭は大きく鍵形をなしている。珠文は 12~13 を数えると考えられる。飾面の彫りは比較的浅い。
- (6) 内区には巴文、外区の珠文は内側のみ圓線がめぐっており外縁とを界する圓線は認められない。珠文は細かく、尾は細くて長い。鎌倉~室町期のものと考えられる。
- (7) 内区は消失のため明らかでない。外区は圓線に開まれた珠文から構成されている。周縁は高いが、彫りは浅い。全体に丁寧であり本調査出土例中最も古く、鎌倉期のものと考えられる。
- (8) 内区に左まわりの巴文、外区に珠文を配する軒丸瓦の上半部分である。
- (9) 内区に左まわりの巴文、外区に珠文を配する。飾板が薄く丸瓦との接合は、上端部にわずかに喰い込ませる手法を用いている。
- (10) 外区に細かい珠文を配している。外区の珠文は、内側に圓文がみられるが、外側

のそれにはみられない。珠文が細かく比較的古い様相を示すものであり、室町期頃と考えられる。

(ii) 中心飾りを欠失しているため全体を想定することは出来ないが、内区に均整唐草文を配し、低い段額をなす棟瓦である。

小 結

嶽山遺跡出土の石器は、全て包含層などから出土し、明確に遺構にともなっておらず、遺跡の性格も不明である。しかし、ローリングを受けた石器が少なく、また嶽山山麓には遺跡が多く、それらを考えれば発掘地点近辺に遺跡があったと考えられる。また、石器の出上が第7トレンチに集中しており、遺跡がこの付近であることが推定される。

石器の時期については明らかにしえないが、石匙や石鎌から考えて縄文時代のものと考えるのが妥当であろう。風化の状態が喜志遺跡や中野遺跡に代表される弥生時代のものより進み、新家遺跡で出土した縄文時代の石器とされているものに近いことからもうかがえる。しかし、ナイフ様石器は槍先形石器の器面調整過程で生じた剥片を用いている公算が強いことから、槍先形石器、一般的には石槍と呼ばれる石器と同時代、つまり弥生時代の所産かとも考えられる。

嶽山の石器の発見は今回が初めてではなく、以前にも石匙とサスカイト片の採集が報告されている。報告書では、佐備川遺跡、錦織遺跡の行動範囲としてとらえられているが、現段階ではそのようにとらえるのが適当であろう。今後の資料の増加をまって再度考察すべきであろうが、ひとつの仮定として今少し具体的に述べるならば、若干の石器作成も行なったキャンプサイトとしてとらえることができないであろうか。縄文式あるいは弥生式土器の出土はみられなかったが、出土した剥片、石核から見るに（例えばfig. 11-22, 30, 31）石器製作が行なわれていたことは疑う余地はなく、これら石器を単なる狩猟時の落とし物としてかたづけることはできないのである。

土師質土器は、小皿を中心としたもので、従来の坊院跡でも出土しているものである。用途は不明であるが、規模、出土量からみて灯明皿あるいは仏具の一種と考

えられ、食器などに供された可能性は少ない。

土釜および瓦質土器については、量的には少ないが、土釜の底部には煤が付着しているものがあるなど、使用痕がみられ、この点では土師質土器とは異なる。

陶質土器は、片口鉢形のもので、播磨地域の产品ときわめて近似する。先述の瓦質土器にも近似する形状のものがみられるが、焼成度合の差は明らかであり、この点での区分は容易である。

陶磁器については、輸入磁器が坊院跡から出土しているが、いずれもC区の摩尼院跡からである点、注目される。すなわち他の二つの坊院跡からは、その出土が確認されておらず、特定の坊院に、それが供給されていたことを知りうる。我が国产の陶器については、常滑焼とみられる壺の破片が出土している。これらの外、古伊万里と考えられる茶碗の破片などがあるが、それらはいずれも日常生活とのかかわりが求められる遺物である。

最後に屋瓦については、ごく一部鎌倉時代にまで遡りうるもののが検出されているが、大半が近世以降のものである。これにより今回調査の坊院跡が、いずれも瓦葺でない建物であったことが判るだろう。

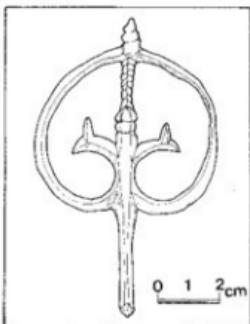


fig. 14 脇之坊出土木棟実測図

なお、I区についての本格調査は、市教育委員会の直営調査として、11月から開始されており、今回の報告に加えて新しい資料が出上ることが期待される。従って当該地区出土遺物の詳細な検討は、その報告に委ねることとする。

(青木、井山、松田、中村)

あとがき

—調査のいきさつ—

本埋蔵文化財の調査は富田林市の委託をうけて、昭和56年8月12日から9月20日にわたり、嶽山遺跡調査団を組織して実施したものである。

史跡と遺跡をもつ嶽山の山腹を縫うこの道路敷内には、当然何らかの埋蔵文化財関係の構造・遺物の存在が予想された。特に道路は新設と拡幅の二つの部分からなっていた。一つは南麓の蒲付近から中腹の竜泉寺境内までの長さ約500メートルの新設路線と、他の一つは竜泉寺から山頂に至る長さ約1,000メートルの旧道を拡幅する路線とであった。総延長約1.5キロに及ぶ道路といえば、調査対象として決して小規模なものではない。本件に関しては発掘調査に至るまでの経緯について若干触れておく必要があろう。

8月から調査を実施するためには、本来遅くとも6月頃から本格的な準備に入るのが理想である。この嶽山に関しては7～8月期間の調査を予想して、徐々に夏休中の日程を内部的に組みつつあった。ところが市として用地を確保する過程で予想以上に慎重な日時を要した結果、はたして予定時期に文化財の調査を行なう段取りになるかどうか、見通しが立たないという状況になったのである。7月中、計画は膠着状態のままに過ぎ、われわれは別途の計画によることを余儀なくされた。とともに、本調査は現在竜泉寺の副住職を兼ねる大谷女子大学の中村浩氏に依頼するのを最適と考え、市教育委員会にもはかってきたので、この事態はやむをえない事情とはいえ申し訳ないことであった。

7月末を迎えて、用地問題が急転解決する見通しとなったので、無理を承知の上で8月中旬から調査を実施することになり、計画遂行上の要請をうけて急拠調査団を組織することにした。現場は当初の予定のように中村氏を主任とし、調査補助の人々にも緊急に協力を願い、漸く発掘の鍬を入れることができた。開始後の経過はすでに記したとおりである。

調査団としては、本調査にあたって富田林市当局の配慮、とくに建設部各位および現地での調査の分担、事務処理の上で周到な世話を頂いた市教育委員会社会教育

課職員諸氏にまず深甚の謝意を表したい。また作業員の方々その他の点で大阪府教育委員会の援助と、松本建設の協力を得たことを銘記して感謝する。

調査団を組織したのは、緊急に調査に臨むことになったため、現場での作業遂行にあたり市との連絡・協議を円滑にする目的で便宜上とった処置であったが、途中さして大きな協議事項が生じなかったのは幸であった。団長として今回の調査に際し、終始現場で多くの心労を費した主任中村浩氏に負うところを明らかにしておく次第である。(北野耕平)

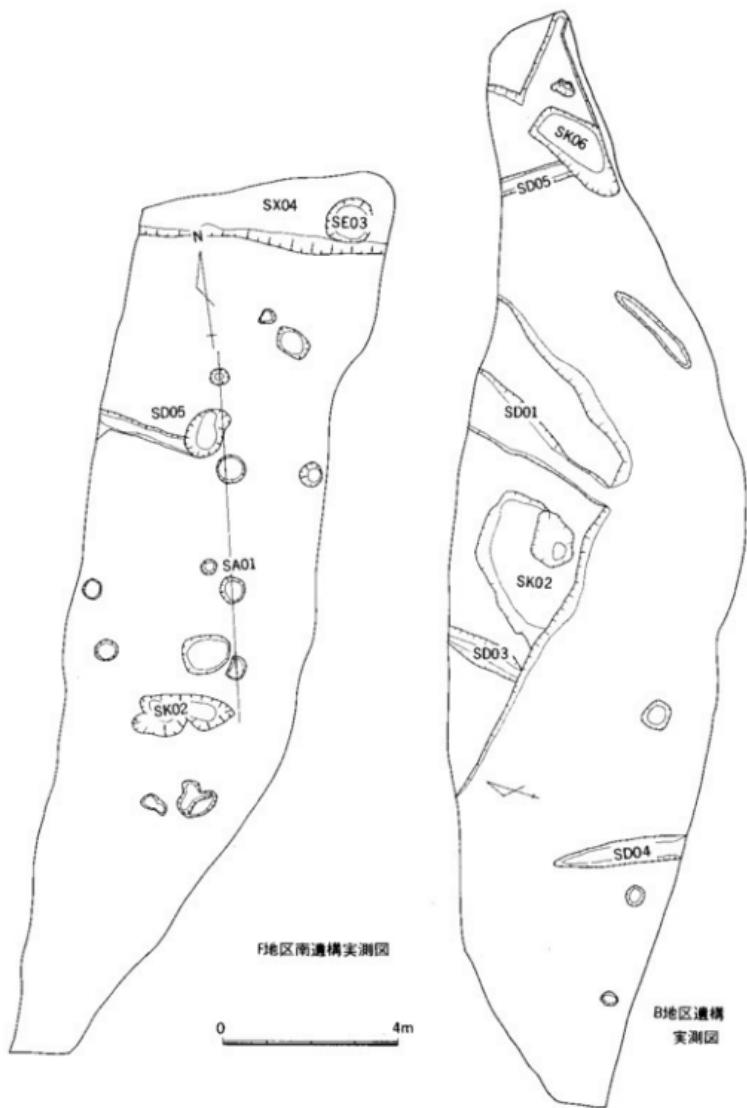
獄山遺跡調査団

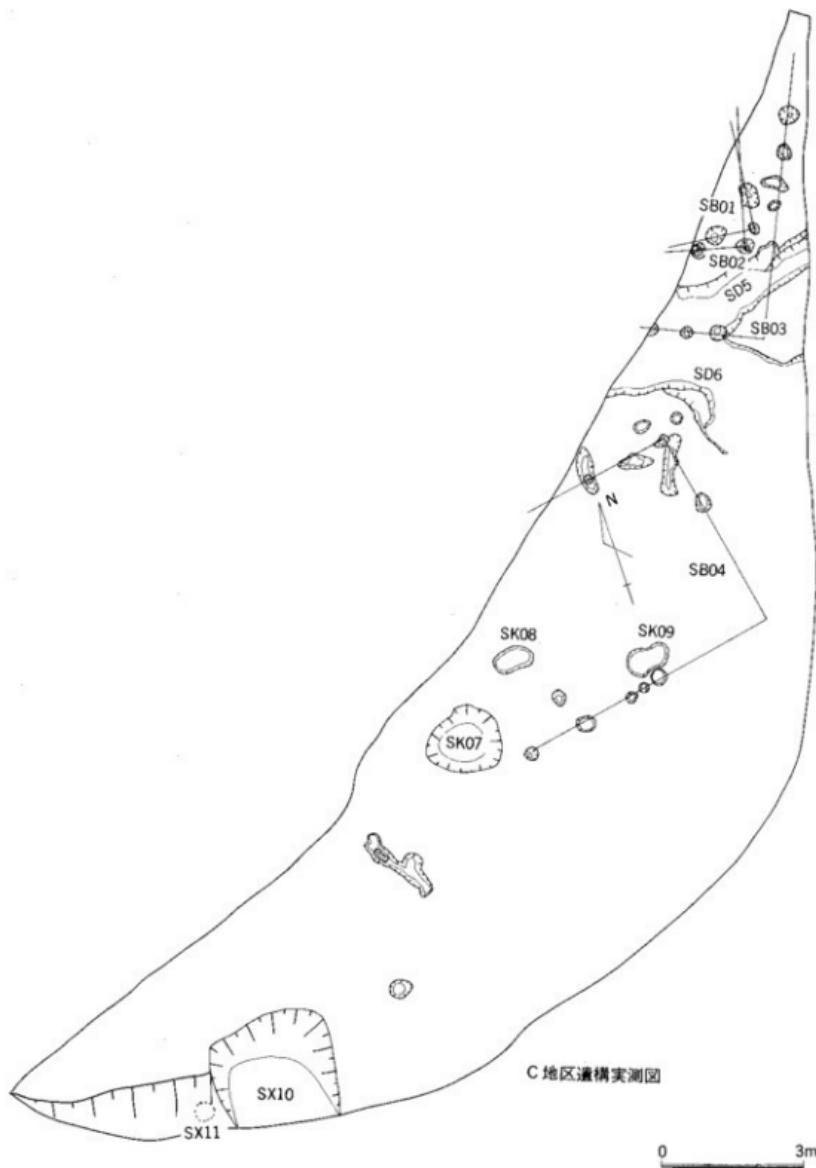
団長 北野 耕平

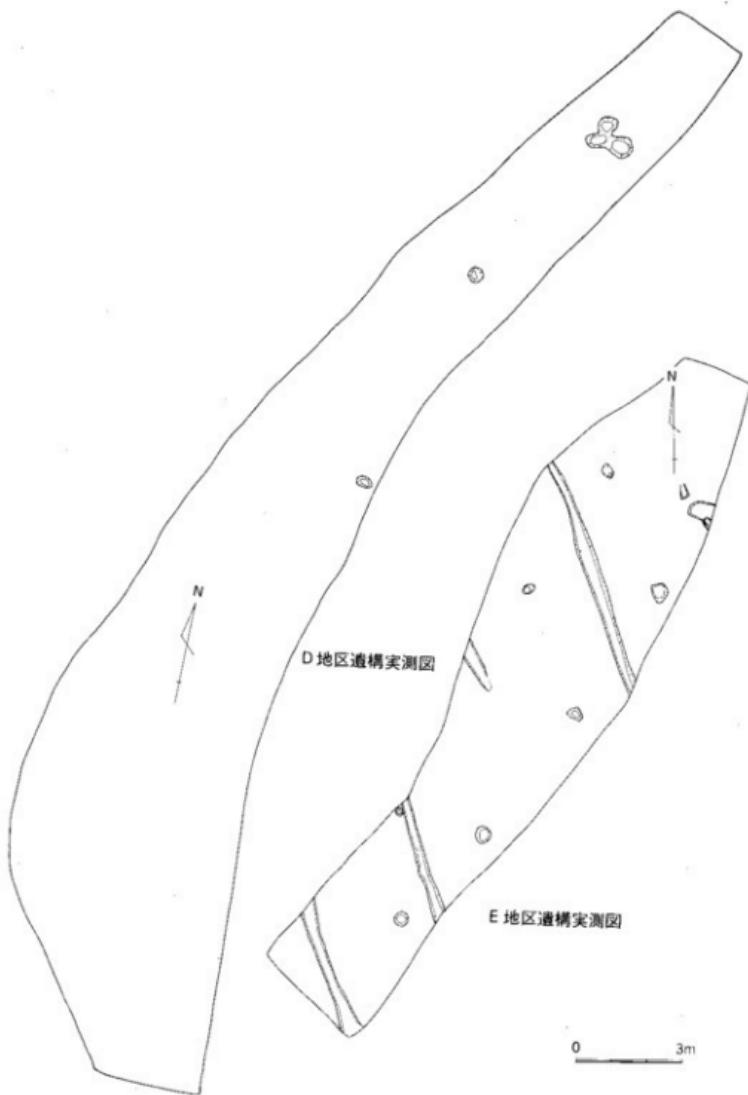
P L A T E

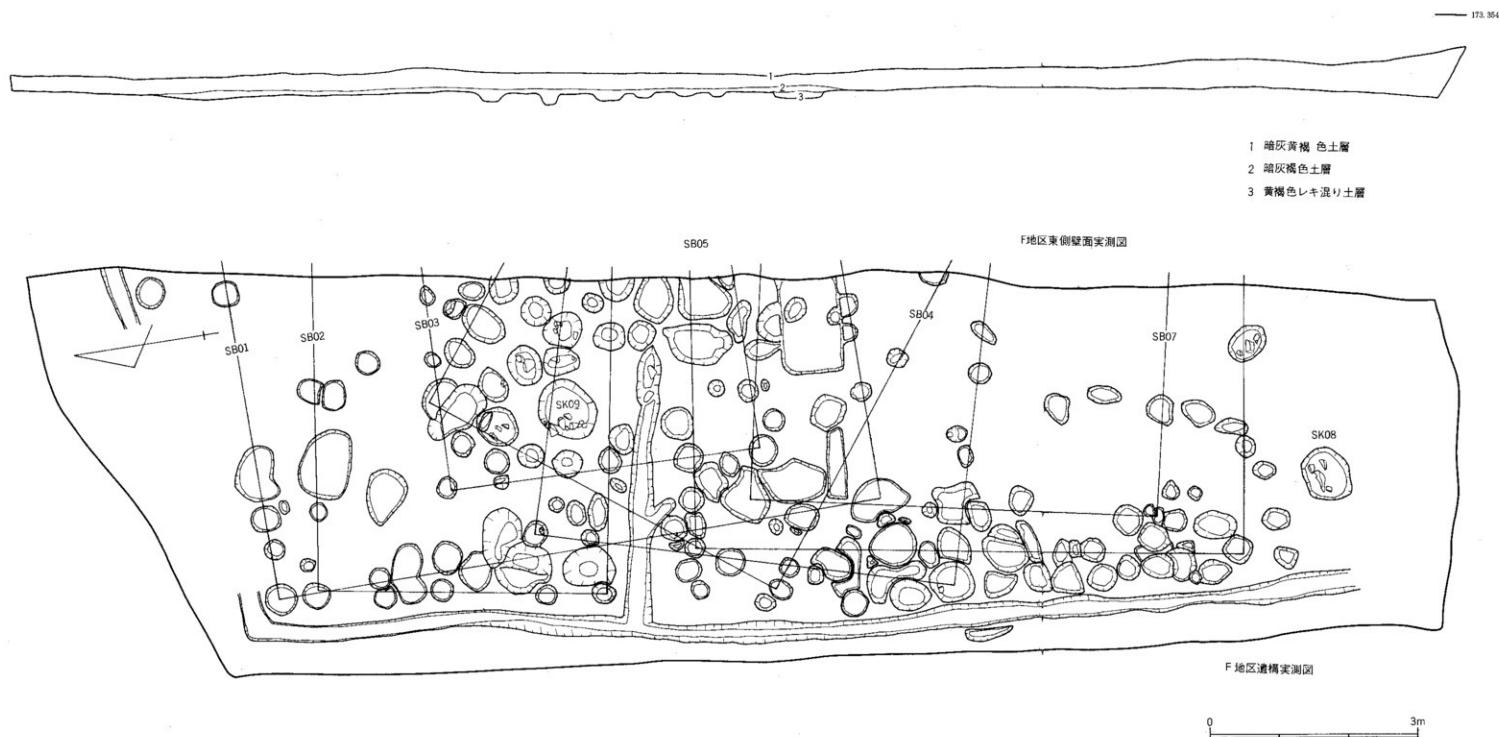


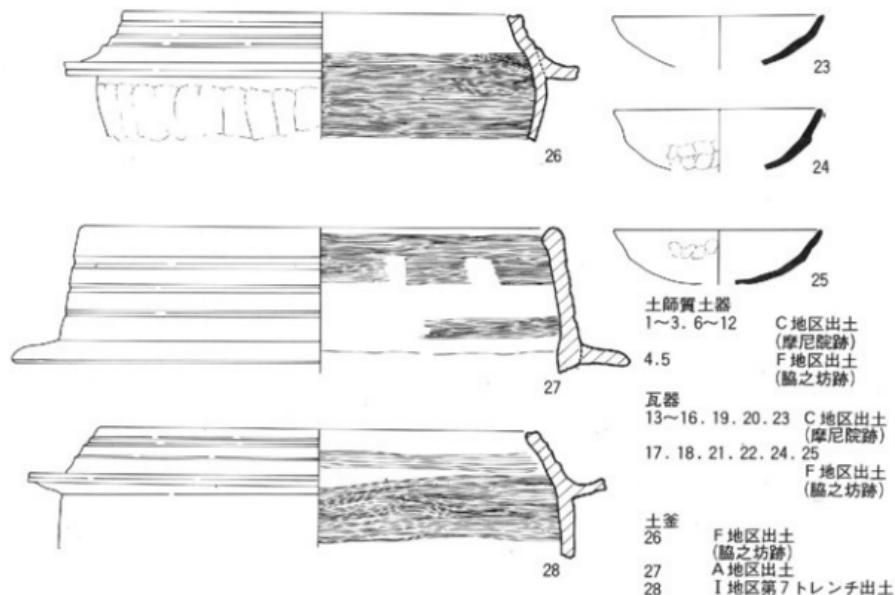
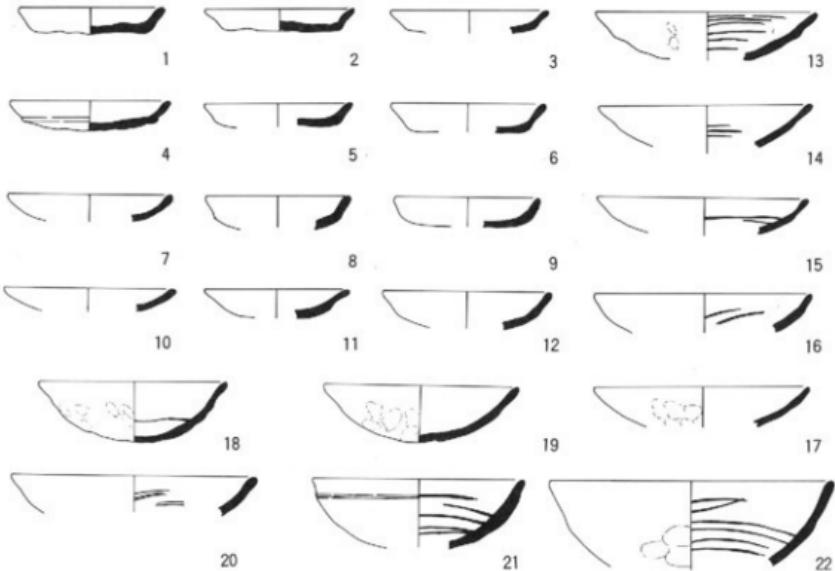
調査地点と周辺の遺跡





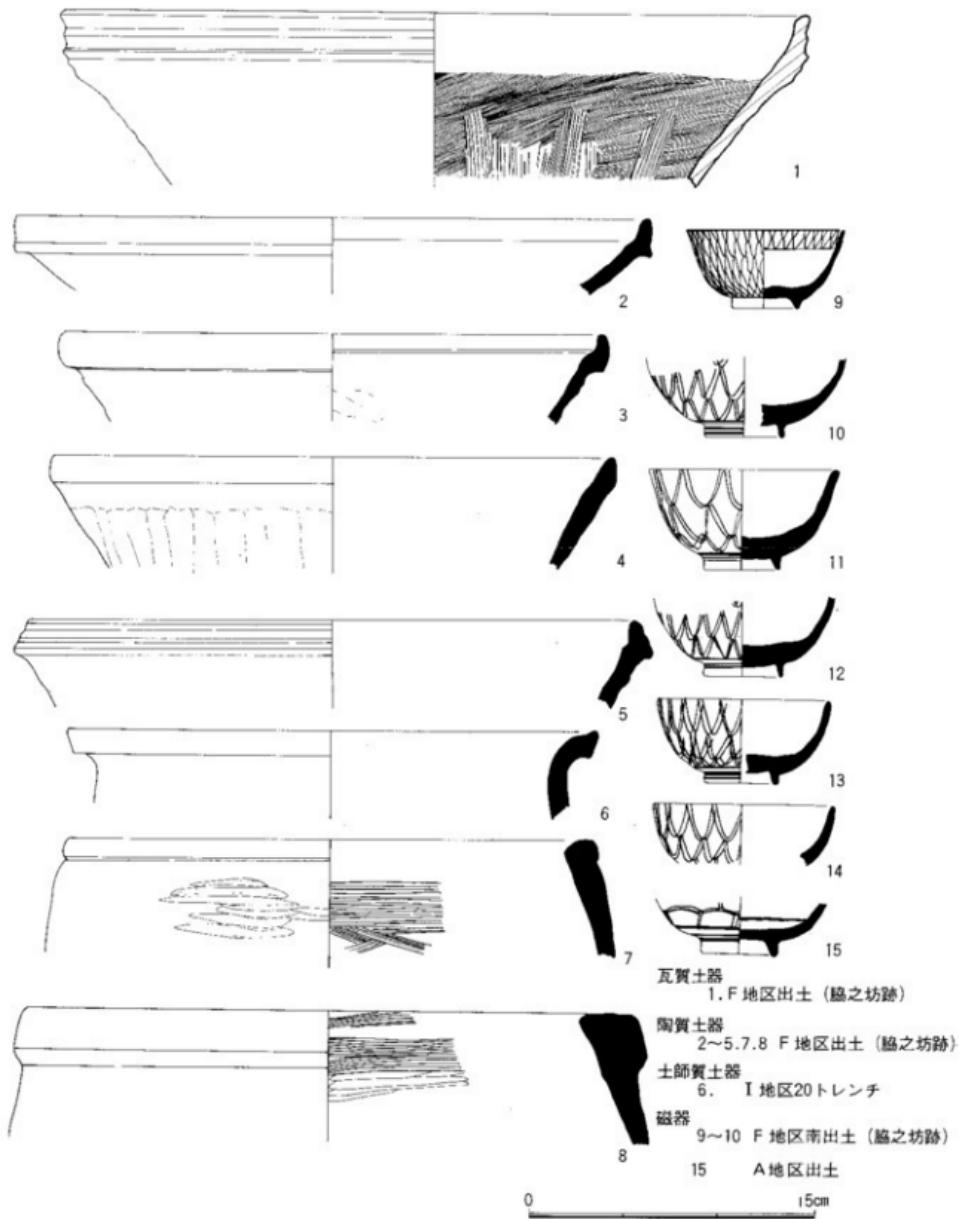




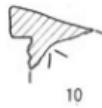
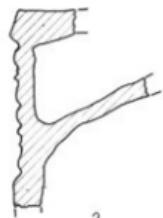
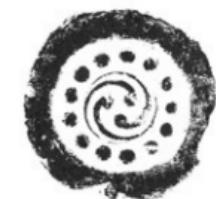
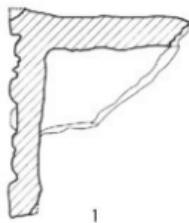


0 - 15cm

遺物実測図 (土師質土器, 瓦器, 土釜)



遺物実測図（瓦質土器、陶質土器、土師質土器、磁器）

軒丸瓦
1.4~93
10F 地区南出土
(臨之坊跡)
B 地区出土
(前之坊跡)
C 地区出土
(摩尼院跡)

5

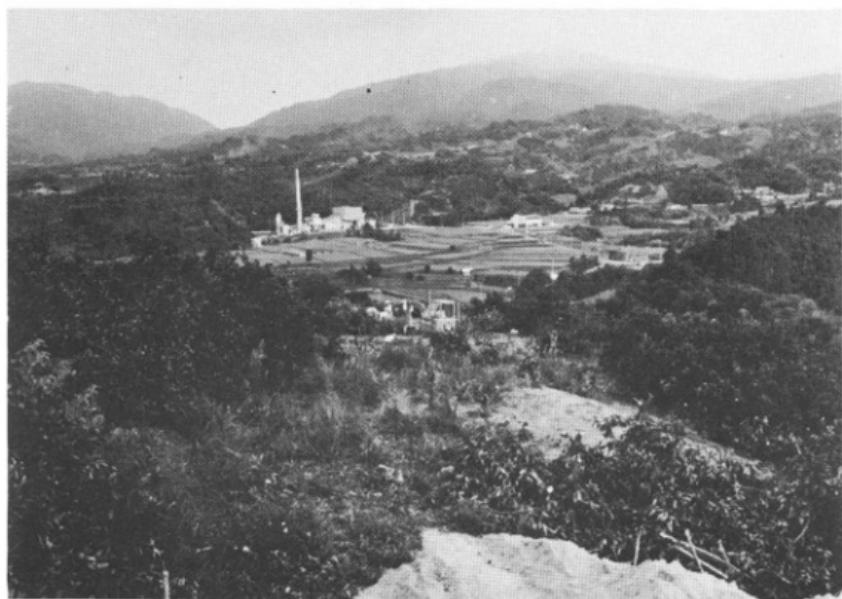
軒平丸
11

2

F 地区南出土
(臨之坊跡)
F 地区南出土
(臨之坊跡)

0 15cm

遺物実測図および拓影（軒丸瓦、軒平瓦、鳥衾）



第1～5トレンチ遠景



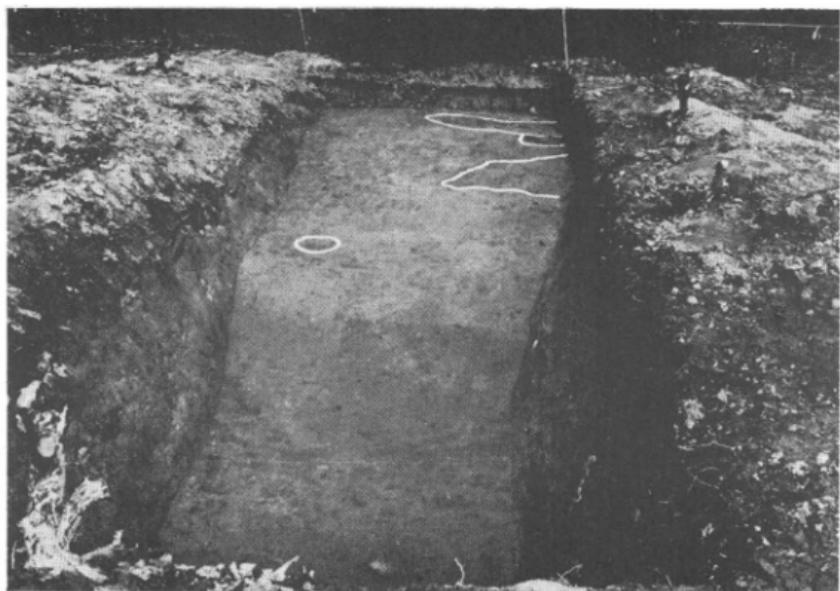
第1トレンチ全景



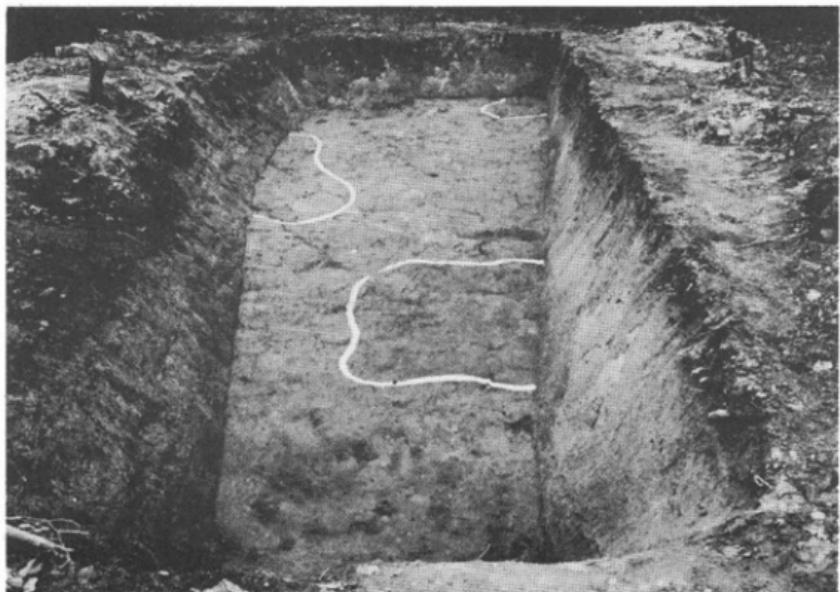
第2トレンチ全景



第3トレンチ全景



第4 トレンチ全景



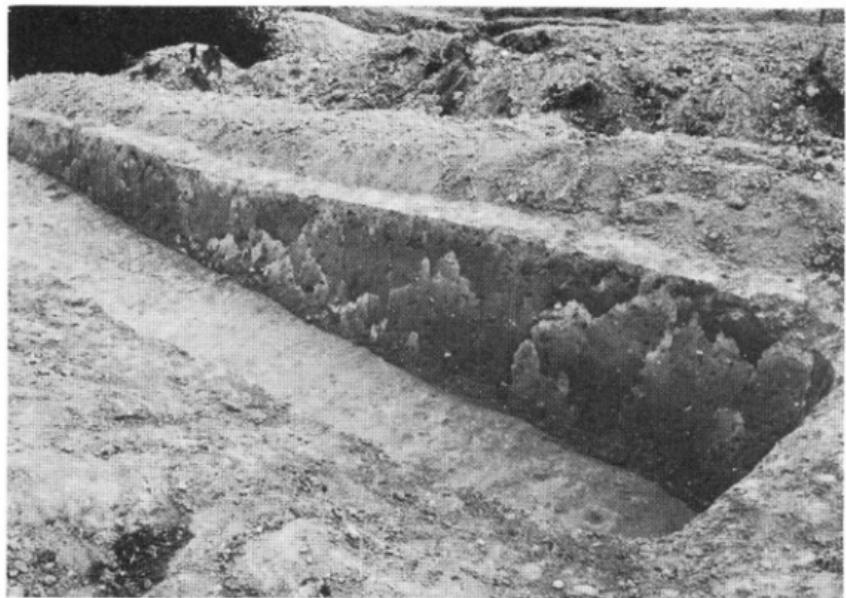
第5 トレンチ全景



第6 トレンチ全景



第7 トレンチ全景



第8 トレンチ全景



第9 トレンチ全景



第10トレンチ全景



第11トレンチ全景



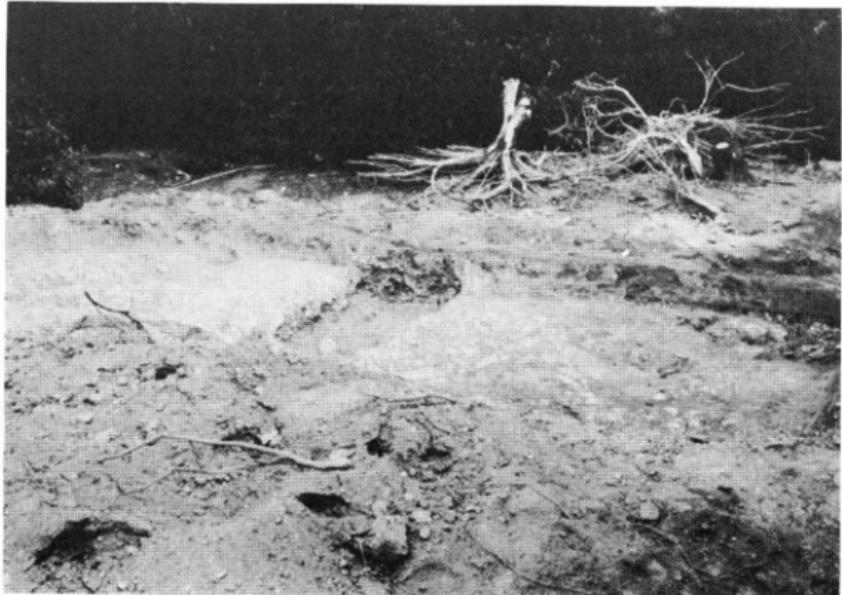
第12トレンチ全景



第13トレンチ全景



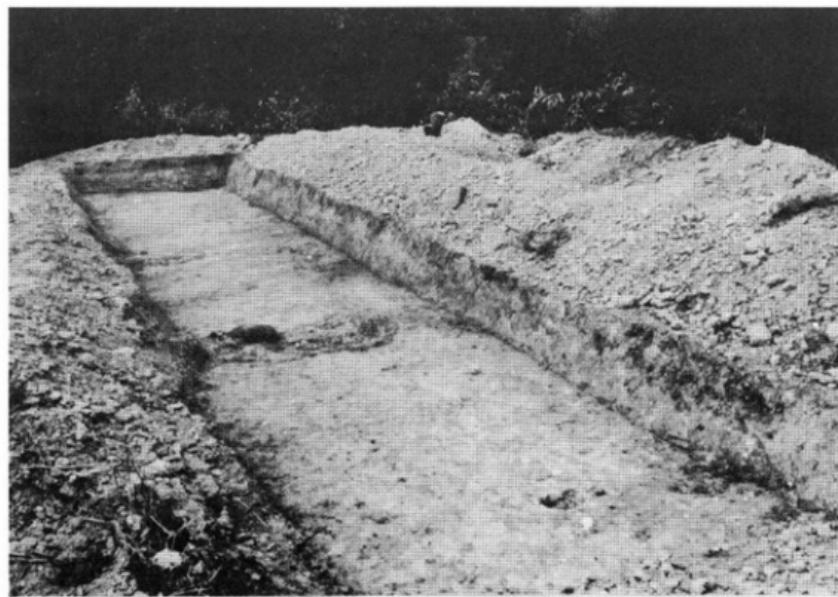
第14 トレンチ全景



第15 トレンチ全景



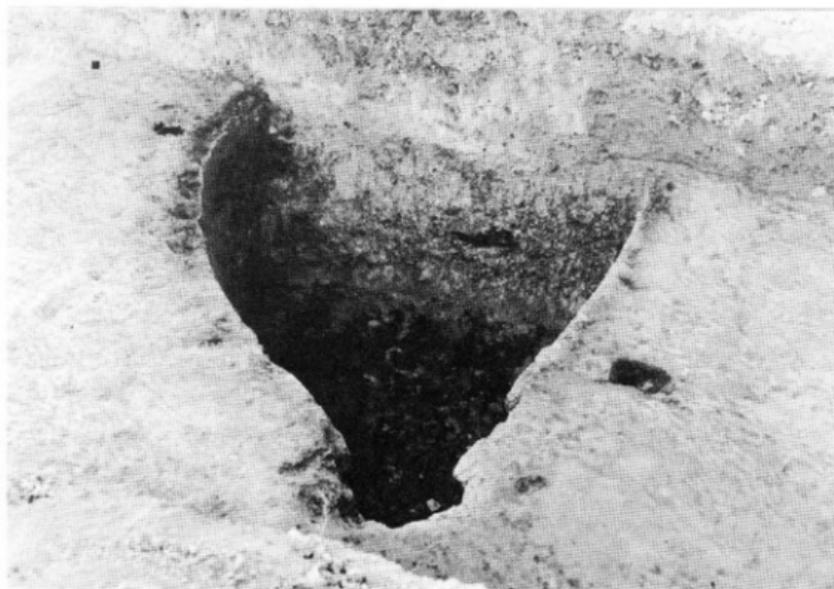
第16トレンチ全景



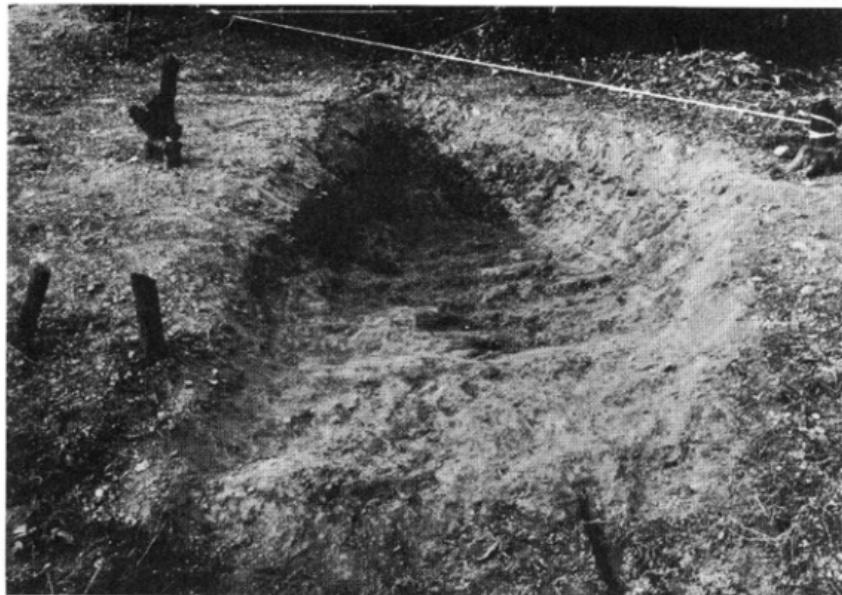
第9トレンチ全景



第20トレンチ全景



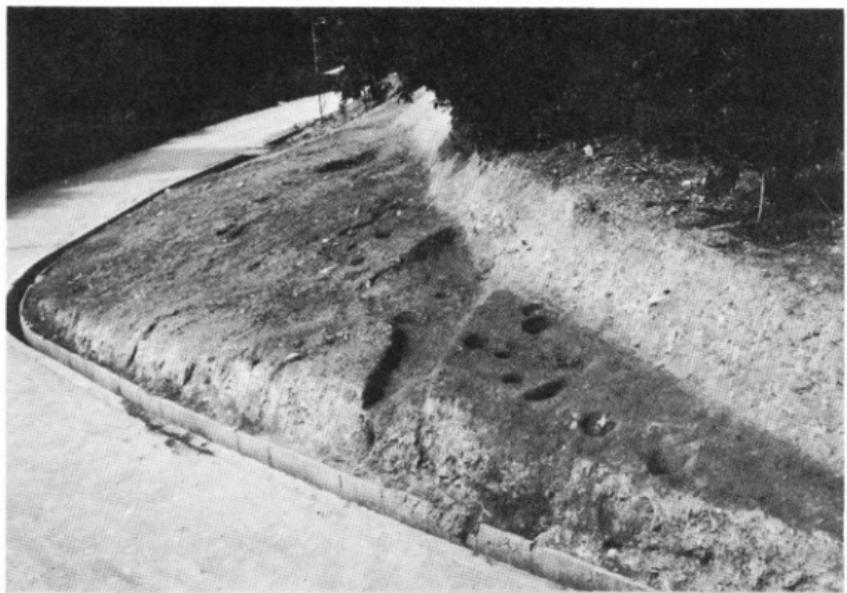
同上（1号窓）細部



A 地区（東部分）



B 地区 全景



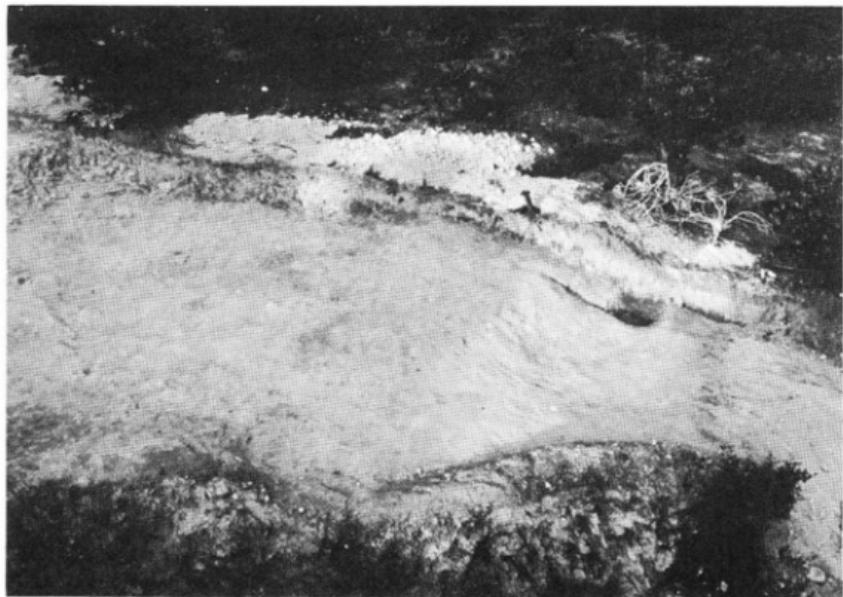
C 地区 全景



同 上



D 地区 北部



D 地区 南部



E地区全景



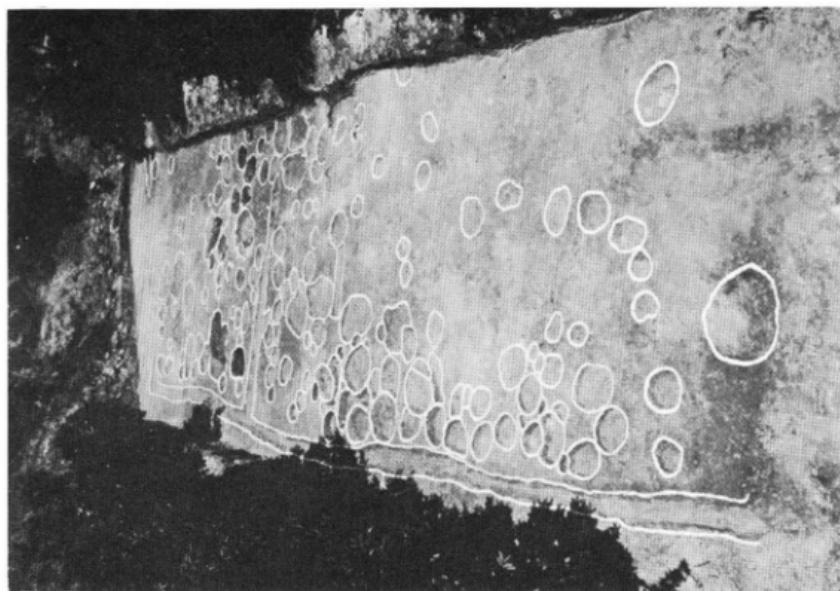
D、E間トレンチ全景



F 地区調査前



同上表土除去後



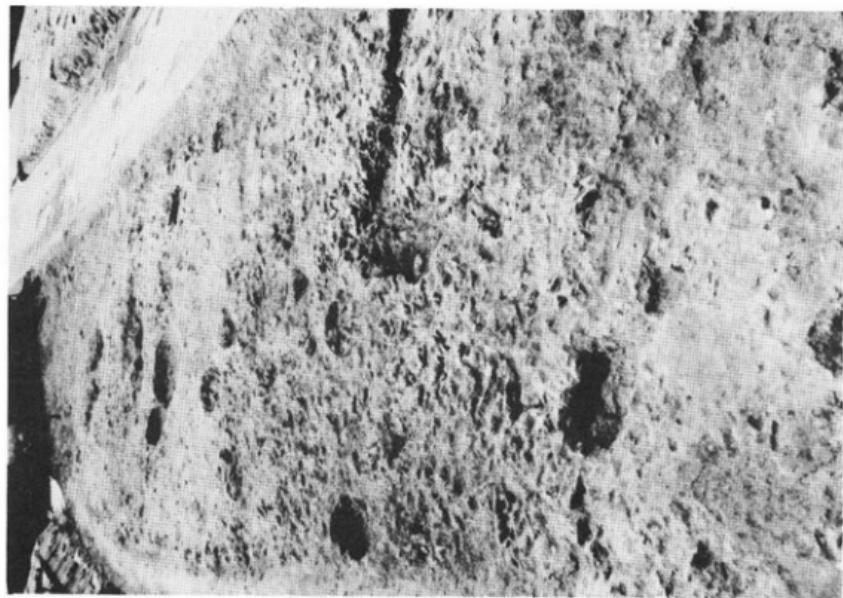
F 地区 遺構



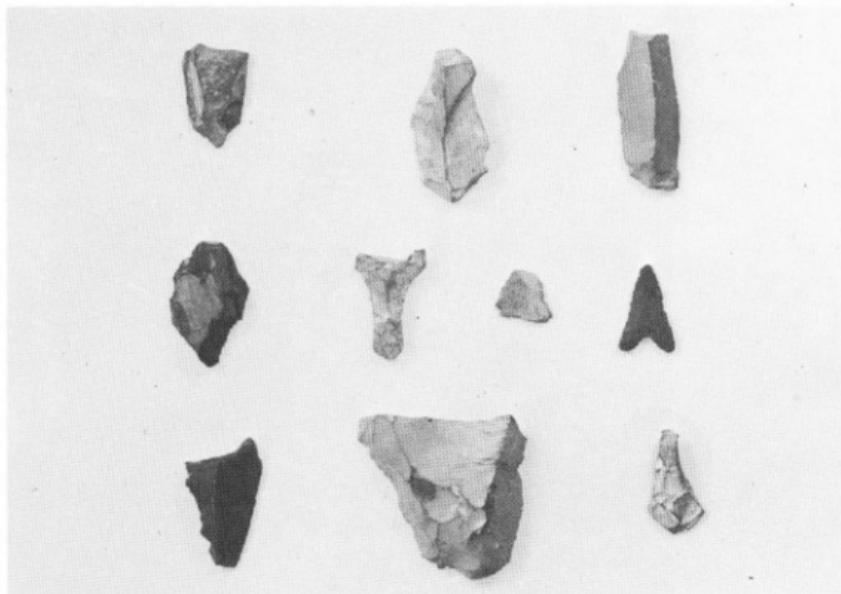
同 上



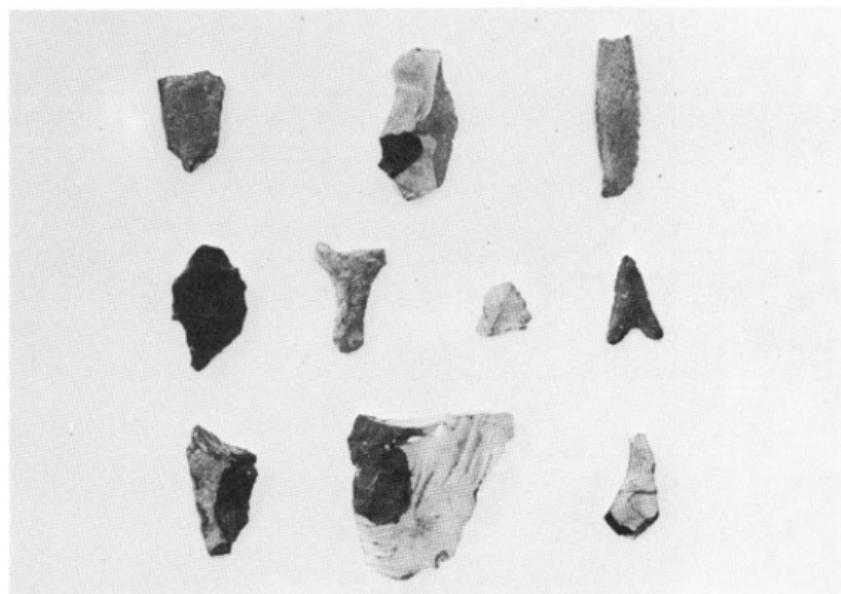
F 地区 (SK09) 土壤



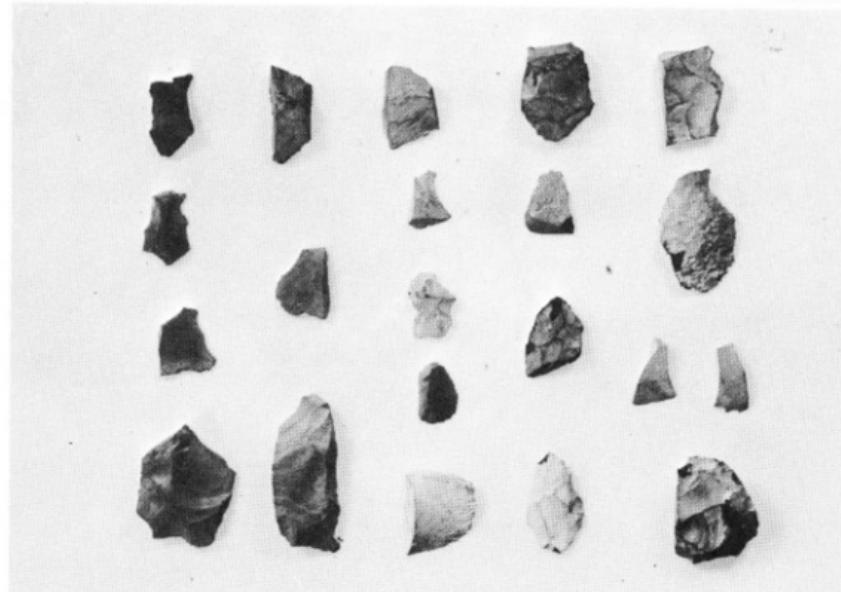
F 地区南遺構



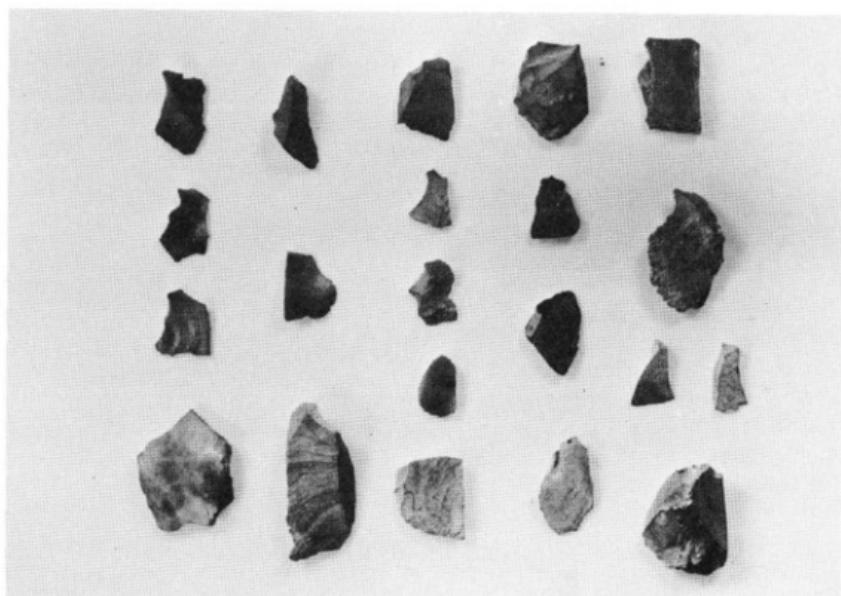
剥片、石器（A面）



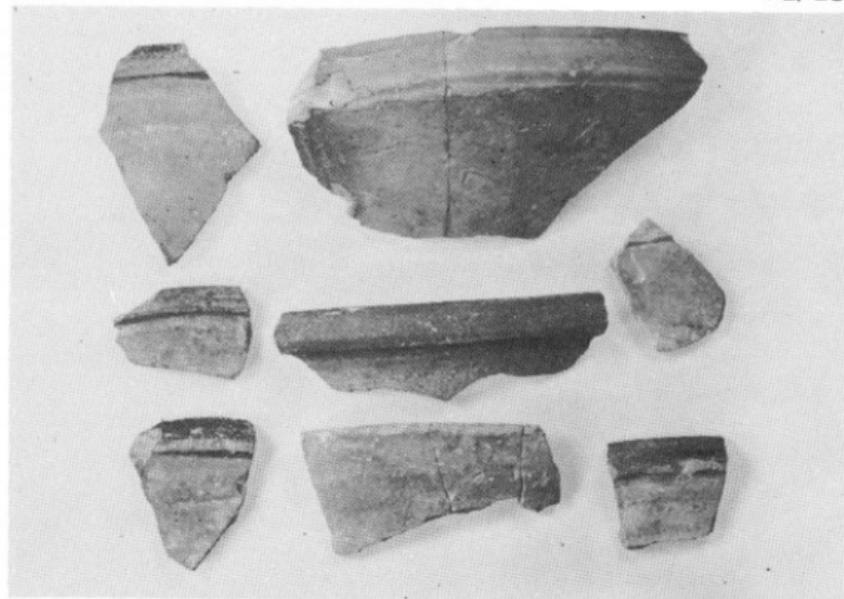
同上（B面）



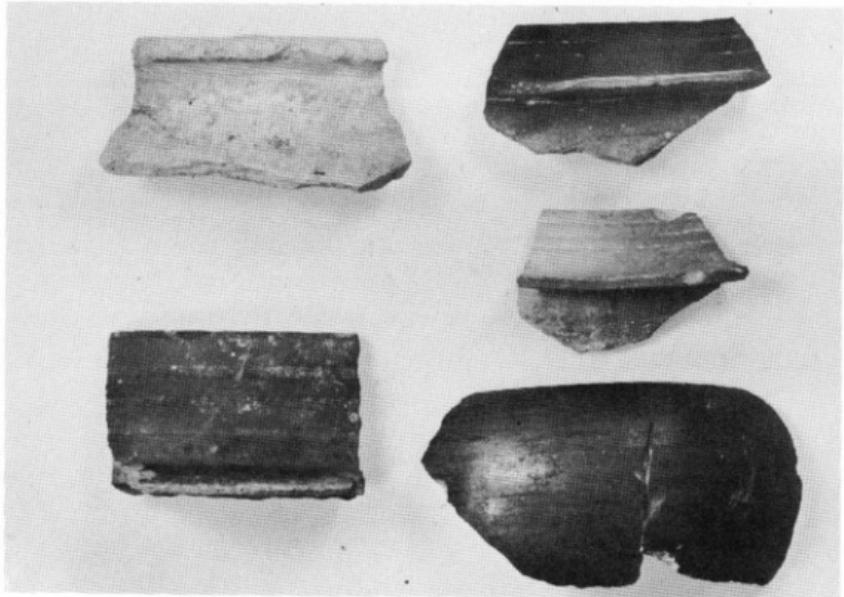
剥片、石器（A面）



同上（B面）



瓦質土器、陶質土器



瓦質土器、土釜



陶 器



磁 器

嶽山遺跡発掘調査報告書

富田林市埋蔵文化財調査報告6

発行年月日 1981年12月2日

編集 嶽山遺跡調査団

発行 富田林市教育委員会

印刷 日杵印刷株式会社

